



# チャシコツ岬上遺跡国史跡指定記念シンポジウム 「オホーツク文化と古代日本」

## I. 開催趣旨

本年2月、斜里町のチャシコツ岬上遺跡が国史跡として指定を受けました。本遺跡はオホーツク文化の人々の集落跡であり、周囲を海に囲まれた崖の上に31軒もの竪穴住居が密に築かれています。本シンポジウムは、オホーツク文化と古代日本をテーマに、史跡の示す価値と、じんどうかいほう神功開竇の発見によって明らかとなったオホーツク文化と古代日本とのつながりを紹介し、町民がチャシコツ岬上遺跡について理解を深めることを目的に企画したものです。

主催：斜里町立知床博物館

協力：知床北こぶしグループ、公益財団法人知床財団、知床博物館協力会

## II. 日時

2019(令和元)年11月9日(土) 13:00～16:30

## III. 会場

知床自然センター MEGA スクリーン KINETOKO (北海道斜里郡斜里町遠音別村 531)

## IV. プログラム

12:30 受付  
13:00 開会あいさつ：桑島繁行(斜里町文化財調査委員長)  
司会進行：白杵勲(札幌学院大学)

### 講演

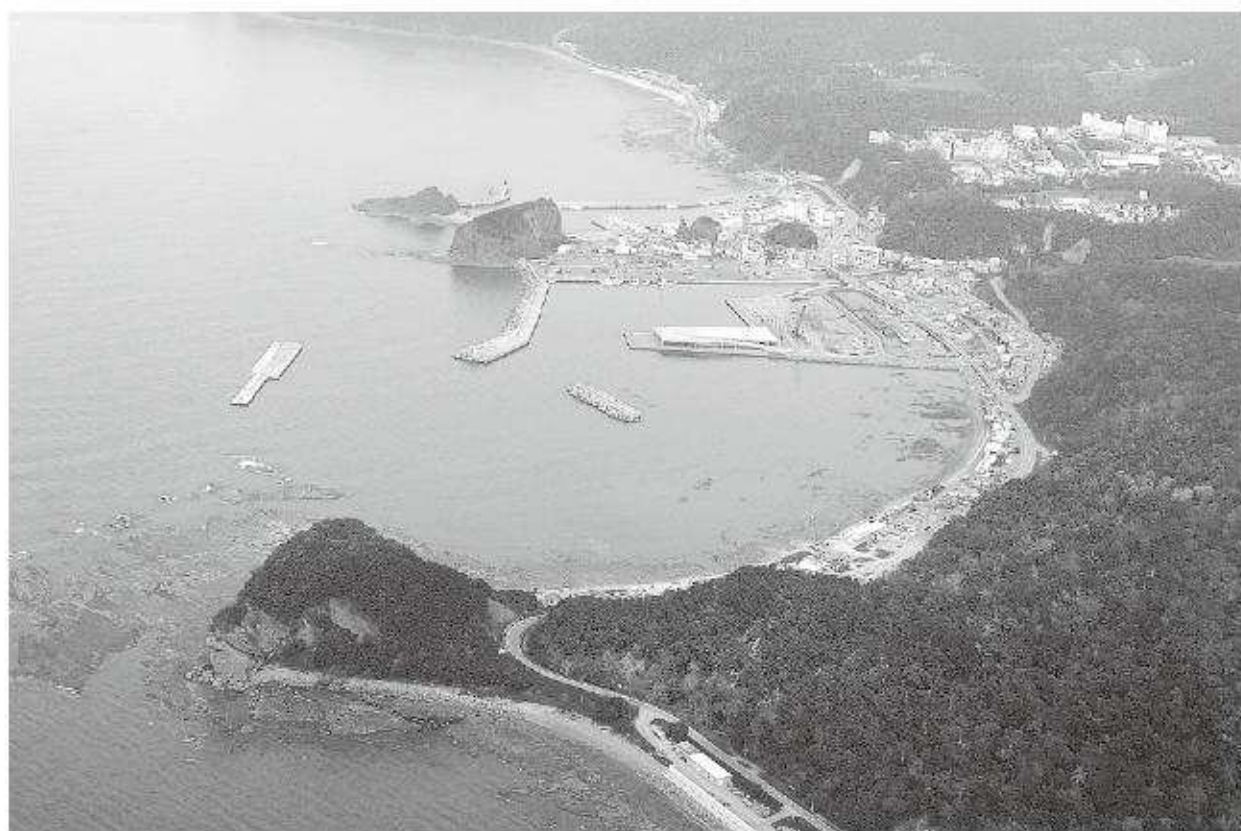
13:10-13:50 オホーツク文化の北海道史における位置づけ(越田賢一郎：札幌国際大学)  
13:50-14:30 チャシコツ岬上遺跡にみるオホーツク文化終末期の姿(平河内毅：知床博物館)  
14:30-14:40 (休憩)  
14:40-15:20 文献史料からみたオホーツク文化をめぐる交流(養島栄紀：北海道大学アイヌ・先住民研究センター)  
15:20-16:00 古代城柵秋田城と北方世界(伊藤武士：秋田城跡歴史資料館)  
16:00-16:10 (休憩)

### 討論

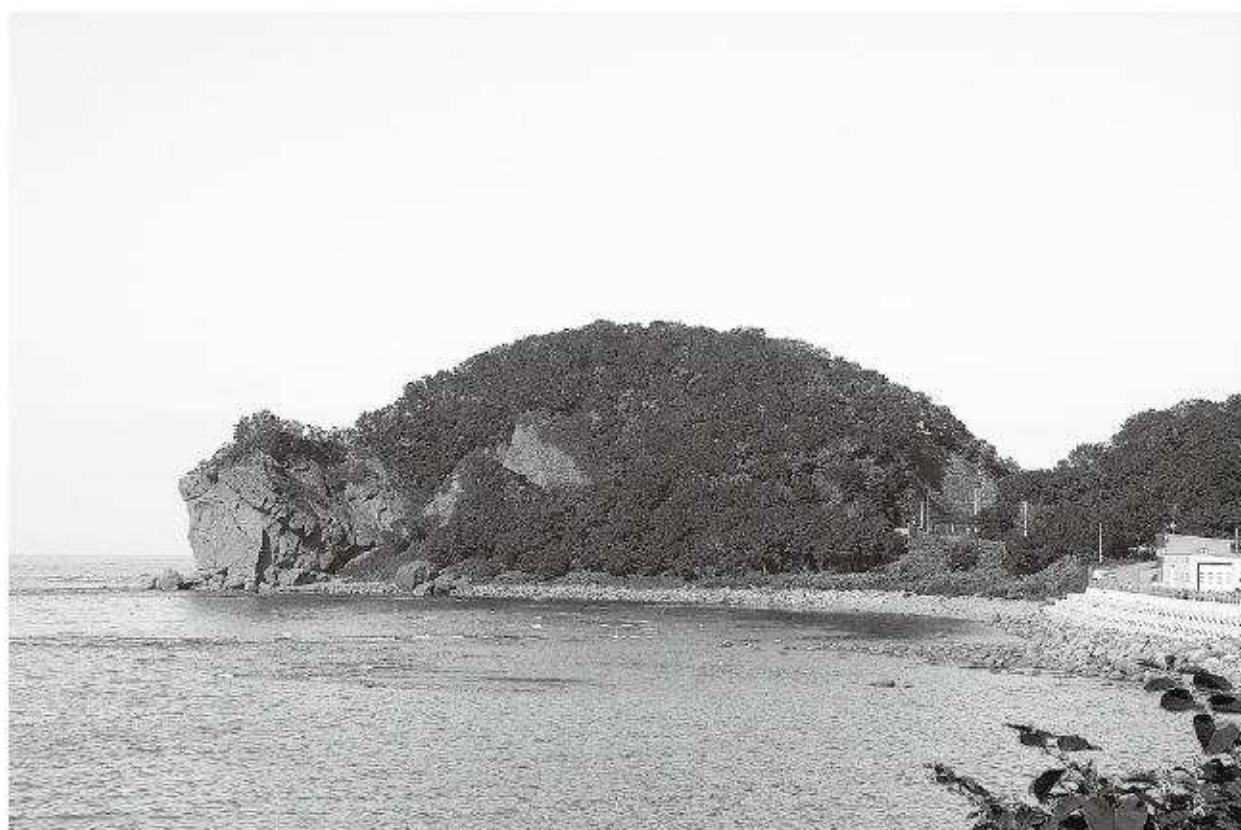
16:10-16:30 コーディネーター：白杵勲  
16:30 閉会あいさつ：岡田秀明(斜里町教育委員会教育長)

## 目次

チャシコツ岬上遺跡国史跡指定記念シンポジウム「オホーツク文化と古代日本」.....	1
図版.....	2
<b>越田 賢一郎</b> .....北海道史におけるオホーツク文化の位置づけ.....	7
<b>平河内 毅</b> .....チャシコツ岬上遺跡にみるオホーツク文化終末期の姿.....	13
<b>養島 栄紀</b> .....文献史料からみたオホーツク文化をめぐる交流.....	19
<b>伊藤 武士</b> .....古代城柵秋田城跡と北方世界.....	25



ウトロ地域



チャシコツ岬上遺跡全景

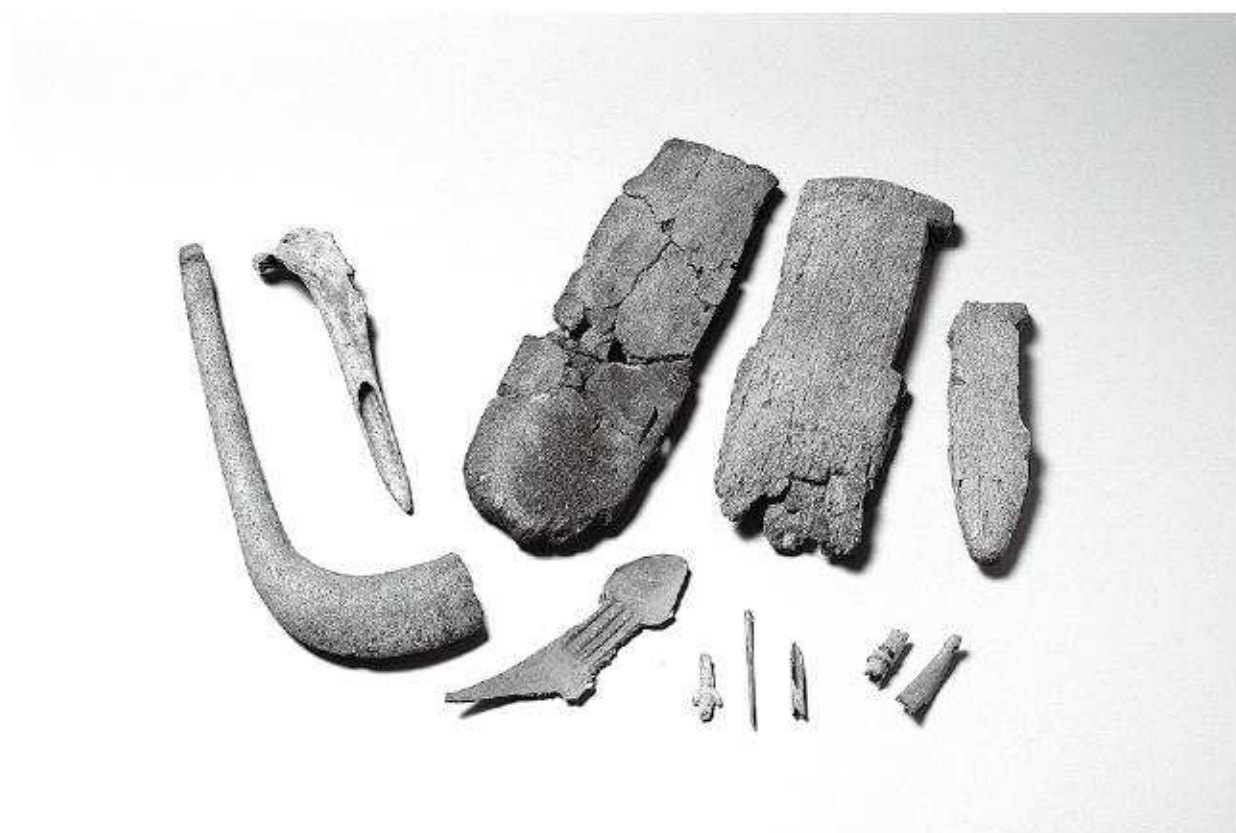


チャンゴツツ坪上遺跡の竪穴分布図



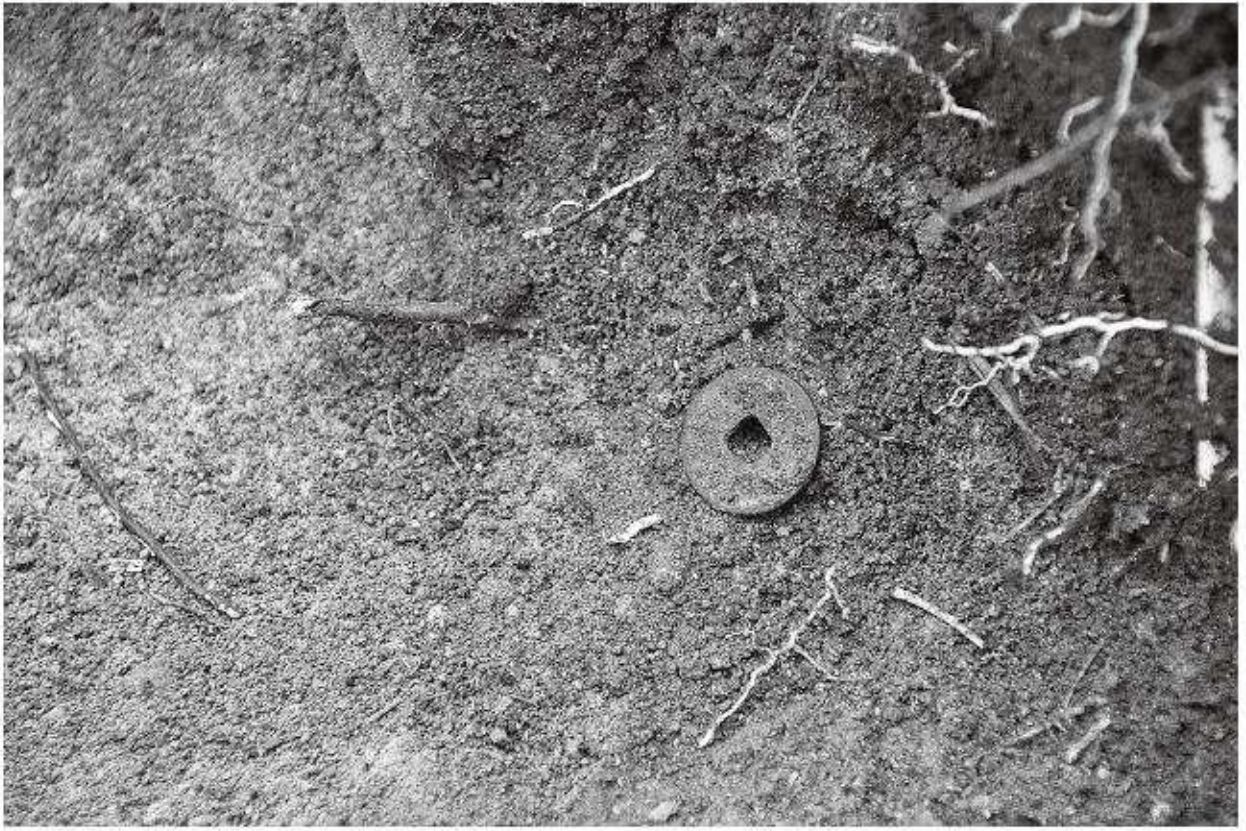


チャシコツ岬上遺跡から出土した土器



チャシコツ岬上遺跡から出土した骨角器





神功開寶の出土状況

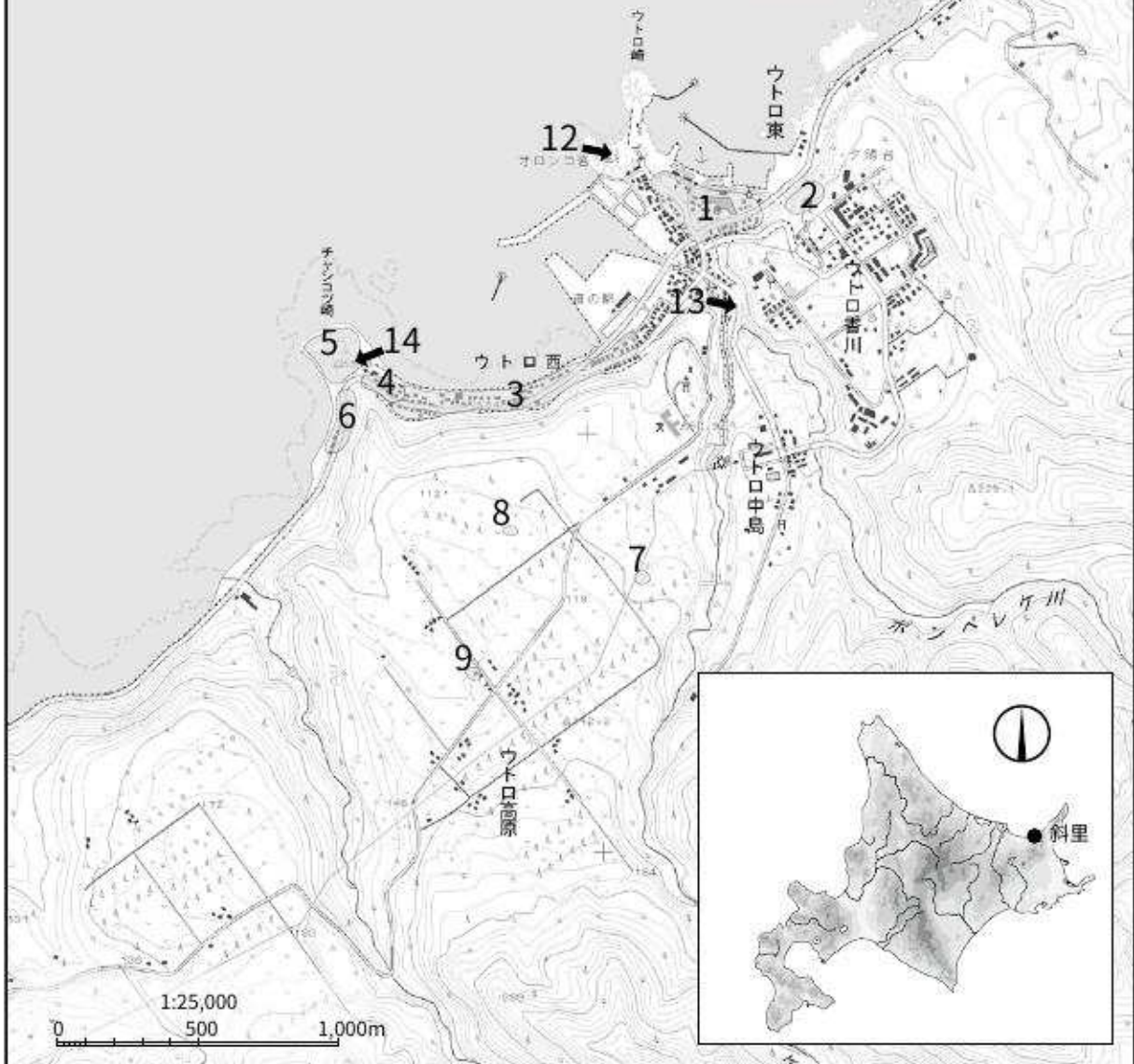


チャシコツ峠上遺跡から出土した神功開寶



# ウトロ地域の遺跡

- 1 ウトロ遺跡
- 2 ウトロ滝上遺跡
- 3 ウトロ西1遺跡
- 4 チャシコツ岬下A遺跡
- 5 チャシコツ岬上遺跡
- 6 チャシコツ岬下B遺跡
- 7 ウトロ高原3遺跡
- 8 ウトロ高原1遺跡
- 9 ウトロ高原2遺跡
- 10 幌別1遺跡
- 11 幌別河口遺跡
- 12 オロンコ岩チャシ遺跡
- 13 ベレケチャシ遺跡
- 14 ウトロチャシ遺跡



地理院地図を改変して使用



# 北海道史におけるオホーツク文化の位置づけ

こしだ けんいちろう  
越田 賢一郎

札幌国際大学 教授

## I. はじめに

北海道島を地図上で眺めてみると、北はサハリン島から大陸へ、東は千島列島弧（クリール諸島）からカムチャツカ半島へと連なっている。一方、南西部は、本州・四国・九州を経て、朝鮮半島へと連なる列島となる。これらの島々と大陸に囲まれた海を主体にしてみると、北海道は、オホーツク海をめぐる環と日本海をめぐる環の接点に位置している。

一方、札幌からの距離をみると、東京までを半径とする円の中に南千島、サハリン島南部及び沿海州が収まり、福岡までを半径とする円の中には、朝鮮半島、中国東北部、アムール河中流部から下流域まで、サハリン島全体、北はカムチャツカ半島南端までの千島列島全体が収まっている（図1）。

このような地理的環境の中で展開してきた北海道の歴史は、日本の北辺の歴史として扱われてきた。同じように、中国史では夷狄の世界として、ロシア史ではシベリア・極東征服史の到達点としてなど、現在の国ごとの辺境史

として語られることが多かった。

20世紀後半以降、地域史や少数民族史の視点と、考古学的成果が蓄積されることによって、ようやく北海道独自の歴史が描かれるようになってきた。

## II. オホーツク文化研究の視点

この北海道島で展開した文化の一つに、オホーツク文化がある。オホーツク文化は、5世紀から13世紀頃まで、主に北海道島の北部からオホーツク海沿岸に広がることから名付けられた。オホーツク文化の最初の発見は、米村喜男衛氏によるモヨロ貝塚の調査であった。貝塚からは海棲哺乳類の骨によって作られた骨角器が多く出土し、土器には「ゾーメン文」とよばれる特殊な貼付文やスタンプで押したような文様が見られるなど、本州や北海道南西部とは大きく異なる文化であると紹介された。日本史の立場からは、北海道の局地的な文化として受け止められ、オホーツク人が本州系日本人やアイヌの人々とその形質人類学的特徴が異なることから、“流水と共に来て、流水と共に去る”といった特殊なイメージで語られることが多かった。

だが、ロシア（旧ソ連）との共同研究が進んで、沿海州方面やサハリン、オホーツク海沿岸域の状況が明らかになり、アムール河中下流域からサハリンを経由しての北海道との関係だけでなく、アムール河口部やサハリン北部とオホーツク海北岸との関連、北海道から千島列島北部までオホーツク文化が進出していることなどが明らかになってきた（白杵2004；熊木2018など）。

さらに、最近のミトコンドリアDNA分析から、オホーツク人の遺伝子に、アムール下流域の少数民族やカムチャツカ半島の少数民族と共通するハプログループが認められることが指摘されている（増田2013）。

一方、オホーツク文化と擦文文化や本州を中心とする文化（以下「土師器文化」と仮称する）との関連を示す遺物も出土している。斜里町チャシコツ岬上遺跡から出土した皇朝十二銭の「神功開寶」はその中でも代表的な遺物である。

オホーツク文化の中に、環日本海文化と環オホーツク

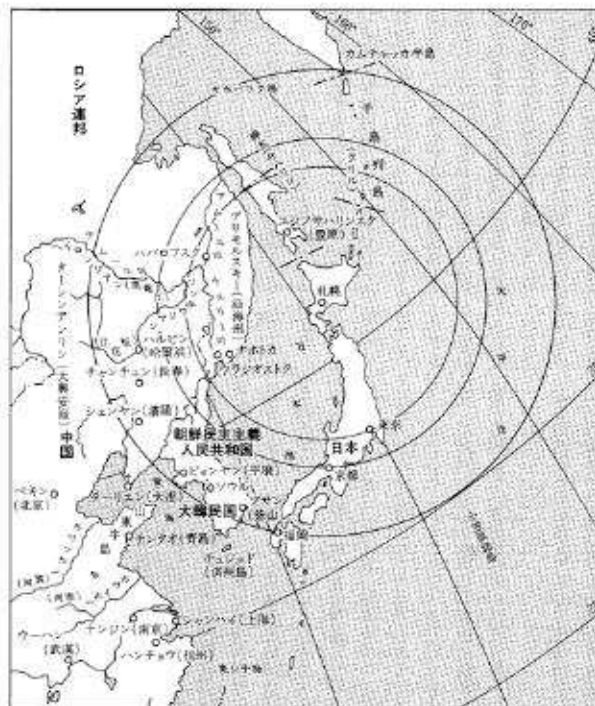


図1 北海道の位置（越田2003）

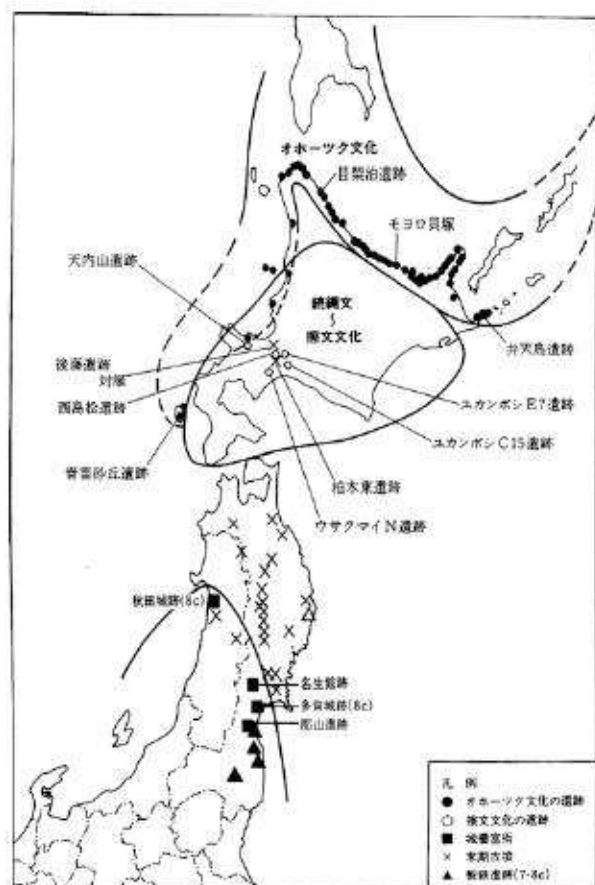


図2 オホーツク文化・擦文文化・土師器文化の関係 (越田 2003)

海文化の接点としての位置づけが明確になってきたといえよう。この視点から、現段階でのオホーツク文化研究の到達点と課題を簡単にまとめておきたい。

### III. オホーツク文化の変遷とその年代

#### 1. 統縄文文化とオホーツク文化の関連

オホーツク文化が展開する前段階の統縄文文化期には、北海道北東部に宇津内式土器と下田ノ沢式土器が展開していた。その後、道央の後北C、D式土器が道東に広がり、さらに千島列島南部のクナシリ、エトロフからも出土している。一方、サハリン中部から南部に展開していた鈴谷式土器が道北部に広がった。それに後続する十和田式土器と江ノ浦式土器が、サハリンから北海道へと広がるオホーツク文化の土器としてとらえることができる。

なお、鈴谷式土器の年代については、紀元1-4世紀頃と考えられているが、最近のサハリンまでを含めた放射性炭素年代測定結果では、紀元前4世紀から6世紀と大きな幅がある。またそれに次々と考えられている十和田式の年代についても、これまでの5・6世紀頃との

推定とは大きく外れた結果が出ている(熊木ら2017)。ここでは、諸説ある中で、右代の年代推定(右代1991)を使用して話を進めていきたい。

#### 2. オホーツク文化の展開と擦文文化

サハリンから南下した十和田式(刺突文土器)は、5・6世紀にかけて道北部に定着し、分布域を大きく広げることではない。7世紀頃には、次の江ノ浦式土器(刻文土器)が道東にも大きく分布圏を広げる。この時期の土器は、アムール川中流域の靺鞨文化と関連する特徴を持ち、オホーツク海の北部にも進出し、一部は千島列島北部へも広がっていくことが知られている(菊池1995; 白杵2004; 熊木2018)。その後、8-9世紀に道東部では貼付文土器、道北部では沈線文土器が展開し、地域色がみられるようになる。

オホーツク文化がサハリンからオホーツク海沿岸部に広がり、さらに千島列島へも浸透していく時期に、北海道南西部では擦文文化が展開していた(図2)。擦文文化は、7世紀中頃に北海道南西部の統縄文文化が本州の土師器文化の影響を受けて変容し、成立したと考えられている。方形でかまどを持つ竪穴住居に住み、オオムギ、アワ、キビ、ヒエなどの雑穀類を栽培していた。それまでの狩猟・採集生活に農耕的要素が加わったことになる。擦文文化の生活用具には刀子、鎌、鉄斧などの鉄器が使用されており、石器はほとんどみられない。擦文文化成立期の土葬墓には、直刀、刀子、鉄鏃などが副葬される特徴がある。また、道央部には土師器文化の末期古墳の系譜を引くと考えられる、「北海道式古墳」が築かれた。

この背景には、朝鮮半島諸国や中国の政権と対外関係を持ち続けてきた、本州島西部の政権が国家体制を強化すると共に、本州東北部へその勢力を拡大して、城柵を整備していく動きがある。対外的に「倭」から「日本」と国名が変わる時期にあたる。

9世紀後半から10世紀に、擦文文化は道北部から道東部へも広がり、オホーツク文化の広がる地域と接触することになる。オホーツク文化の竪穴住居が五角形ないし六角形の平面形で、中央に炉を持つ形態であるのに対し、平面形が方形で、壁の一面にかまどを持つ住居形態で、刻文と呼ばれる幾何学的な文様を持つ土器を使用していた。

#### 3. トビニタイ文化と元地文化——融合形式の存在

道東部では、10世紀頃にオホーツク式土器と擦文土



器の融合型式であるトピニタイ土器が出現する。土器だけでなく、住居の面でも竪穴の平面が四角形で中央に石囲いの炉を持つ形態に変化し、遺跡立地が沿岸部から内陸部へも広がるなど、オホーツク文化と擦文文化の特徴を合わせ持っている。

擦文文化終末期にはトピニタイ土器がみられないことから、12世紀にはトピニタイ文化が擦文文化に吸収されたと考えられている。トピニタイ文化は、オホーツク文化が擦文文化に吸収されていく過程としてとらえられることが多い。だが、道東地域のアイヌ文化への移行を考える上で、オホーツク文化人が積極的に擦文文化要素を取り入れて、両者が一体化しアイヌ文化の形成を導いたとの説が出されている(大西2009)。

なお、道北部には、11世紀頃にオホーツク式土器と擦文土器との融合形式とされる元地式土器がみられるが、その文化内容は明らかになっていない。

#### IV. オホーツク文化の特徴

オホーツク文化の遺跡から検出される遺構や遺物には、先行する続縄文文化や並行する擦文文化と大きく異なるものがみられる。遺跡立地が海岸部に限定され内陸部にはみられないことから、遺跡からは海と関連した貝殻、海獣骨、魚骨など、その獲得を目的とした銚頭、中柄、釣針などの漁労具、また、海獣骨を利用した鎌や笥などの道具類が豊富に出土する。擦文文化ではみられない銚先鎌、錐、ナイフ、斧などの石器が日常生活で使用され続けているのも大きな特色となっている。特殊なものでは、舟の錘石もある。

遺構では、五角形ないし六角形の大型竪穴住居跡がみられ、その床に炉を囲む様にコの字形の貼り床を持つなどの特色がみられる。その住居の一角には、「骨塚」といわれる、ヒグマの頭などが積み上げた場がある。

また、墓は伸展葬または屈葬の土葬墓で、配石を持つものなどいくつかの形態がみられ、特に頭部に甕をかぶった状態で検出される被葬葬は特徴的である。墓の副葬品として、土器の他、鉾、刀などの武具や刀子類、青銅製品などの「威信財」が納められている。

生業は遺跡が海岸部に立地することから、海棲哺乳類の狩猟や漁労に大きく依存しているが、陸獣の狩猟も行われている。また、オオムギなどの雑穀種子が検出されるとともに、ブタの骨が検出されて家畜として飼育されていた可能性が指摘されるなど、農耕牧畜民としての要素を持っていたことも注目されている。

精神性を示すものに、クジラ、シャチ、エイ、水鳥、クマなど様々な動物の彫刻がある。また、セイウチの牙や

マッコウクジラの歯で作られた女性像もオホーツク文化独特のものである。

これらの文化要素には、大陸の文化と関連するものがある一方、擦文文化や土師器文化と関連するものがあるので、これらについて取り上げてみたい。

### V. 大陸系の物質文化と本州系の物質文化

#### 1. 大陸系の遺物

モヨロ貝塚の調査以来、オホーツク文化には、靺鞨文化、渤海文化、女真文化など大陸系の遺物がみられることが指摘されてきた。武器や狩猟具としての鉄鉾や鉄鎌、木材を伐採し加工するための柱状片刃石斧や板状鉄斧、様々な加工に使われた曲手刀子などの生活用具類、威信財や装身具としての青銅製帯金具、鐸、鈴、飾り紙などがある。他に「遼代土器」とされる陶器も出土している。また、出土したブタの骨や、炭化した農耕作物種子も刻文期頃までは大陸系と考えられる。

枝幸町目梨泊遺跡やモヨロ貝塚の墓に副葬品として納められた威信財の分析から、刻文期には大陸系の鉄鉾と曲手刀子が副葬され、新しくなると直刀、蕨手刀など本州系の遺物へと変化していくことが指摘されている(高島2005)。

#### 2. 本州系の遺物

本州系の遺物としては、土師器が伴出したオホーツク土器の年代を決める資料となっている。また、直刀、蕨手刀などの武器類は、主に墓の副葬品として出土しており、擦文早期の墓や「北海道式古墳」との関係で注目されている。袋柄鉄斧は10世紀の擦文文化頃から出土するものと同形で、東北部の鉄生産との関係など、擦文期後半の物資流通を考える資料となっている。これに、チャシコツ岬上遺跡の「神功開寶」(765年初鑄)が加わったことになる。これらの遺物の入手がどのような過程を経て行われたかの検討が重要となっている。

#### 3. 青苗砂丘遺跡と南西部のオホーツク式土器

南西部の日本海に浮かぶ奥尻島の青苗砂丘遺跡で、オホーツク文化の遺構と遺物、土師器、クマ頭骨などがみつまっている。オホーツク文化の遺構には、十和田式土器が出土する竪穴住居跡、刻文、沈線文期の土器とそれに伴う竪穴住居跡、住居の覆土に掘り込まれた墓2基などがある。女性墓からは、クックルケン(帯飾り)や

曲手刀子など道東や道北と共通するものがみつかるが、骨の特徴から、オホーツク人ではなく、続縄文人系の特徴を持つと判断されている(北海道立埋蔵文化財センター 2002、2003)。

奥尻島では、宮津チャン跡からも刻文土器が表面採集されている。この遺跡の他にも、道央部から南西部の海岸線で、留萌市街地(貼付文土器)、増毛町阿分3遺跡(貼付文土器)、石狩市浜益岡島洞窟遺跡(刺突文土器)、小樽市忍路土場(刻文土器)、蘭越町尻別川河口(貼付文:トビニタイ)などでオホーツク土器が採集されている。いずれも河口部に位置し、海上交通に便利な地点となっており、奥尻島と道北部を結ぶ中継点としてとらえることができよう。

また、内陸部では、千歳市ウサクマイN遺跡で貼付文土器、恵庭市茂漁8遺跡で刻文土器が出土している。ウサクマイN遺跡では富寿神寶(818年初鑄)、茂漁8遺跡では隆平永寶(796年初鑄)が出土しており、土師器文化とオホーツク文化の要素が共にみられることが注目される。

このようなオホーツク文化と擦文文化との関連、擦文文化と土師器文化との関連は、その目的が鉄器の入手にあった可能性が強い。擦文文化の人々は、域内の海産物や毛皮を土師器文化圏の人々の鉄器と交換し、自家消費するだけでなく、オホーツク人の毛皮を入手する交換財していた可能性がある。10世紀頃からの擦文人の道北、道東進出によって、全道的な鉄器の流通形態が出来上がっていったと思われる。

北海道の南西部と北東部では、異なった文化が展開することが多く、その中でもオホーツク文化と擦文文化の差は大きい。10世紀頃から擦文文化が道北からオホーツク海沿岸へと広がっていくが、両者が接触するためにはそれぞれの文化が、変質を遂げなければ不可能であったと思われる。オホーツク文化がトビニタイ文化へと変質を遂げるのと同様に、道東に進出した擦文人もまた変質したために、結果的に「同化現象」としてとらえられるのではないだろうか。

オホーツク文化と擦文文化がトビニタイ文化を経て同化することによって、全道的な流通網が完成する。それによって、鉄鍋が全道に広がり擦文土器の終焉を迎えることにつながっていく。平地住居への転換も含めた「アイヌ文化期」への移行が可能になったといえよう。

## VI. オホーツク人の系統研究

オホーツク文化の墓から出土した骨の形質人類学的分析では、当初イヌイトやアレウトとの関連が指摘され

ていたが、その後アムール河下流域のニブフ、ウルチなどとの関係が指摘されるようになった。頭蓋形態小変異の形質を用いた分析でもこれを支持しており、アイヌや縄文人骨にも類似した点があることが指摘されている(石田2010)。

また、遺伝子分析の結果でも、増田隆一(2013)によれば、37人分のミトコンドリア遺伝子の一部の情報(遺伝情報コントロール領域)の分析から、オホーツク人は現在のアムール河下流域やサハリン北部のニブフ、ウリチ、ネギタールの人達と非常に近縁であること、一方コリヤークやエベンなどカムチャツカ半島周辺の少数民族にもある程度近いことが明らかになってきた。

また、ミトコンドリアDNA全体から遺伝情報を分析し、オホーツク人のハプログループを決定したところ、G1b(24%)、N9b(11%)、Y(40%)が高頻度でみられることがわかった。Yグループはニブフが60%、ウリチ、ネギタールも高頻度で、アイヌの人達は20%となる。北海道縄文人や本州縄文人にはYグループは全くみられないので、アイヌの人達はオホーツク文化の人達からYグループを受け継いだ可能性がある。また、カムチャツカでは、G1bというグループが多くみられ、それが、アムール下流域や北海道縄文人に若干存在することも指摘されている(安達2012)。

最近では核DNAの分析も進んできており、今後も様々な展開が考えられる。

## VII. おわりに

### 1. 文献史学との関連

オホーツク文化は5世紀から13世紀頃まで存続していることから、周辺国の文字記録からの研究も行われている。中国では、東北部の松花江・黒龍江流域における靺鞨の活動が盛んになる7世紀の貞観14(640)年に、「流鬼」が唐に朝貢した記録が『通典』などに見られる。「流鬼」をサハリンやカムチャツカと推定し、オホーツク文化と関連させて考える動きがある。

また、『日本書紀』斉明天皇4年から6年(658-660年)には、阿倍比羅夫が船団を率いて北方の状況視察に出向き、「津軽蝦夷」や「渡嶋蝦夷」などと接触し、「肅慎」と争う記事が出ている。この「渡嶋蝦夷」を続縄文末期から擦文初頭の北海道の人々、「肅慎」をオホーツク文化人にあてる議論も盛んである。だが、文字記録を持つなど確実な出土品が無い限り、文献上の名称と考古学的集団を断定的に結びつけるのは困難であり、状況証拠にとどめる姿勢が必要である。



## 2. 文化のクロスロードとしての北海道

サハリンを通しての北海道と大陸のつながりは、旧石器時代に始まり、縄文時代には晩式土器、石刃鎌文化、押型文土器などに見られ、続縄文期以降相互の交流が盛んになり、オホーツク文化において顕著になった。それに続くアイヌ文化期においても、山丹交易と呼ばれるアムール河下流域の少数民族と、サハリンアイヌや北海道アイヌとの交易がおこなわれていたことが知られている。文化の伝播にはいくつかの波があったかと思われるが、常に隣接地域としての関連は持ち続けられていたと考える必要はないだろう。

一方、環オホーツク海の視点では、菊池俊彦が指摘するように、オホーツク海北部にもオホーツク式土器に類似した土器が見られ、千島列島最北端のシムシュ島にまでオホーツク文化が及んでいることが知られている。文献では『通典』の「流鬼」の条に「夜叉」の存在が記載されており、カムチャツカやその北方の民と推定されている(菊池1995, 2004)。この地域間の結びつきは、遺伝子研究からも指摘されている。

オホーツク文化がトピニタイ文化を通して擦文文化と同化し、北海道全体を結ぶ鉄流通網が形成されたことによって、アイヌ文化が成立したと考えられる。また、遺伝子研究においても、大陸のアムール河下流域やカムチャツカと関連するハプログループが、オホーツク人を通してアイヌの人々に受け継がれていることが明らかになってきた。

オホーツク文化と擦文文化の融合により、北海道の南西部と東北部が結び、サハリンにおけるサハリンアイヌの形成、千島列島における千島アイヌの形成へとつながったと考えられる。北海道は環日本海文化圏と環オホーツク文化圏をつなぐ、クロスロードとしての役割を果たしていたとの視点が、今後の北海道研究で必要であろう。

## VIII. 引用文献

- 右代啓視1991「オホーツク文化の年代学的諸問題」『北海道開拓記念館研究年報』第19号、pp. 23-52
- 安達登2012「ミトコンドリアDNAからみた北日本の基層集団」『新しいアイヌ史の構築—先史編 古代編 中世編—』北海道アイヌ先住民研究センター、pp. 10-21
- 石田肇2010「オホーツク文化を担った人々」『北東アジアの歴史と文化』菊池俊彦編、北海道大学出版会、pp. 257-270
- 白杵勲2004『鉄器時代の東北アジア』同成社
- 大西秀之2009『トピニタイ文化からのアイヌ文化史』同成社
- 菊池俊彦1995『北東アジア古代文化の研究』北海道大学出版会
- 菊池俊彦2004『環オホーツク海古代文化の研究』北海道大学大学院文学研究科
- 熊木敏朗2018「オホーツク海南岸地域古代土器の研究」北海道出版企画センター
- 熊木敏朗・福田正宏・國木田大2017「鈴谷式土器とその年代 柳田國男の『樺太紀行』に寄せて」『国立歴史民俗博物館研究報告』第202集、pp. 101-135
- 越田賢一郎2003「北方社会の物質文化」『蝦夷島と北方世界』吉川弘文館、pp. 90-125
- 高島孝宗2005「オホーツク文化における威信材の分布について」『海と考古学—海交史研究会考古学論集』六一書房、pp. 23-44
- 北海道立埋蔵文化財センター2002『奥尻町青苗砂丘遺跡』重要遺跡確認調査報告書第2集
- 北海道立埋蔵文化財センター2003『奥尻町青苗砂丘遺跡2』重要遺跡確認調査報告書第3集
- 増田隆一2013「遺伝的特徴から見たオホーツク人—大陸と北海道の間の交流」『北海道大学総合博物館研究報告』6、pp. 103-108







# チャシコツ岬上遺跡にみるオホーツク文化終末期の姿

ひら こうちつし  
平河内毅

斜里町立知床博物館 学芸員

## I. はじめに

北海道は北をサハリンや中国大陸に、また、南を本州に挟まれる位置関係にあり、北海道に暮らした人々は様々な地域の影響を受けながら繁栄と衰退を繰り返してきた。とくに、5-9世紀頃の北海道に存在したオホーツク文化という独特な生活様式を有する集団（以下、オホーツク人）は南北と密接に関係しながら展開し、その後忽然と姿を消した人々として古くから注目を集めてきた。ここでは、このオホーツク文化の集落跡として、今年新たに国史跡に指定されたチャシコツ岬上遺跡の特徴とそこから浮かび上がる道東部のオホーツク文化終末期<sup>1</sup>の様子について紹介する。

## II. オホーツク文化の変遷

オホーツク文化とは、5-13世紀（北海道では5-9世紀）までサハリン・北海道・千島列島などのオホーツク海沿岸部に広く分布した古代文化である。彼らの集落跡は海岸から1 km以内ではほぼ限定され（天野2008）、遺跡から見つかる動物遺存体や、銚頭・釣針・石錘などの漁具から、漁撈や海獣狩猟などを生活の基盤とした海洋適応度の高い集団であったと考えられている（高橋2002）。

また、オホーツク人は隣接地域との交流も活発であり、6-8世紀頃までは主にアムール川下流域やサハリンに居住した人々と、また、8世紀後半以降は北海道内の隣接集団や本州文化の人々と交流があったことが出土遺物等からわかっている（臼杵2005；高島2005）。しかし、オホーツク海南岸に広く展開したオホーツク文化も北海道では9世紀頃を境に終焉を迎えてしまう。その背景には古代の北海道に存在したもう一方の集団の存在が挙げられる。

古代の北海道にはオホーツク人の他に、北海道の縄文文化に本州文化の影響が及んで成立した擦文文化（7-13世紀）の集団が併存していた。擦文文化の集団（以下、擦文人）はサケ・マスなどの漁撈のほかに雑穀栽培を生業とし、カマドをもつ方形の竪穴に暮らすなど、

本州文化の影響を強く受けていることが土器や暮らしぶりから明らかとなっている（藤本1981）。この擦文文化の遺跡分布は、初期には石狩低地帯を中心に道央部以南に限定的であるが、時期を経るごとに道北部から道東部にまで分布を拡張してゆく（大西2004）。

そして、擦文文化とオホーツク文化の結び付きが強まる10世紀初め頃にはオホーツク文化が変容し、道東部ではトピニタイ文化へと移行する。その後、トピニタイ文化は次第に擦文文化と融合・同化し、考古学上のアイヌ文化への変化が生じた、という流れで捉えられている（熊本2011）。

以上のように北海道東部は独特な文化変遷たどることを踏まえた上で、主題となるチャシコツ岬上遺跡の内容を整理したい。

## III. チャシコツ岬上遺跡の成果

### 1. 遺跡の概要

これまでの発掘調査から、斜里町にもオホーツク人の遺跡が数多く残されていることが明らかとなっており、ウトロ地域に至っては市街地のほぼ全域が彼らの遺跡と重なっている。中でも、チャシコツ岬上遺跡は一際異彩を放っている。というのも、西側から眺めると亀のような外観をしており（写真1）、その特徴的な姿から、斜里町民には“カメ岩”の愛称で親しまれているためである。そ



写真1 チャシコツ岬上遺跡



の正体は、地滑りによって形成された自然地形であり、岬の先端上部にはチャシコツ岬上遺跡が良好な保存状態で残されている。近年の発掘調査の結果、竪穴住居跡のほか、墓、配石遺構、土坑、廃棄場、遺物集中などが発見され、そのほとんどがオホーツク文化終末期（一部トピニタイ文化前半期を含む）に属するものであることが確認された（平河内2018）。

さらに、2016（平成28）年には古代律令国家が発行した貨幣である神功開寶（765年初鑄）が発掘され、オホーツク文化と本州の交流の可能性が全国に報道されたことで、チャシコツ岬上遺跡の存在は広く知れ渡ることとなった。

本遺跡の年代はオホーツク文化が変容し始める8-9世紀頃に該当し、遺跡から出土した遺構・遺物からはオホーツク文化終末期の様子が窺える。冒頭でも述べたように、忽然と消えたとされるオホーツク文化ではあるが、チャシコツ岬上遺跡の様子を見るとオホーツク文化が次第に変化し、トピニタイ文化へと移行する過程がイメージできる。以下、チャシコツ岬上遺跡を特徴づける諸要素について述べてゆく。

## 2. 遺跡立地と竪穴密度

チャシコツ岬上遺跡が立地する場所は標高55 mの海岸段丘上であり、面積は5,300 m<sup>2</sup>ほどで、周囲は切り立った崖に囲まれている。そのため、集落の防御性は高いが、自らも集落へのアクセスが困難な立地であったように思える。一般的なオホーツク文化の集落は低地の海岸砂丘上に築かれる場合が多いが、その一方で小さな島や独立丘陵、岬状の地形といった特徴的な土地も利用する傾向にある。よって、チャシコツ岬上遺跡もその一群と考えて良いだろう。

驚くべきはこの特徴的な地形上に31棟もの竪穴住居跡が密集して小面積に構築されている点である。これは北海道内では栄浦第二遺跡の47棟に次ぐ規模であり、これまで見つかった多くのオホーツク文化遺跡の竪穴数が6棟前後であることを考えると、チャシコツ岬上遺跡の規模の大きさがわかる。また、遺跡面積に関しては栄浦第二遺跡の約100分の1以下であり、チャシコツ岬上遺跡にどれほど高密度に竪穴が築かれているかが想像できるだろう。これはチャシコツ岬の限られた土地を最大限に活用した結果、高密度に竪穴が分布することになったと考えられる。では、なぜそれほどまでにこの土地に執着する必要があったのだろうか。

一つは視界の確保にあると考える。亀にも似た地形は海上からの視認性が高く、航海のランドマークにも適

している。その点では海洋狩猟民らしい立地とも言える。また、チャシコツ岬上遺跡は高所ゆえ遠方まで見通すことができ、食料資源となる海獣類の動きや船の往来を観察する場所として最適である。実際、その眺望範囲はウトロ遺跡（オホーツク文化前期-後期）よりも圧倒的に広いことがわかる（図1）。

この2つの遺跡には時期差があり、ウトロ遺跡の廃絶後にチャシコツ岬上遺跡の利用が始まっている。同じ地域にありながら、これほどまでに特徴的な立地を選択していることは、何か緊急的にチャシコツ岬上遺跡へ移住しなければならなかったようにも感じられる。ちょうどウトロ遺跡の廃絶時期はオホーツク文化と擦文文化の結びつきが強まる時期にあたるため、こういった外部との接触機会の増加も無関係ではないだろう。

高い防御性や海への広い視界、航海のランドマークとしての機能が得られる一方、崖の上の集落までの水や物資の搬入には相当な苦勞があったと推察される。しかし、発掘調査から明らかとなったのは、意外にもその苦勞を感じさせないほどの充実した暮らしぶりであった。

## 3. 充実した集落機能

チャシコツ岬上遺跡には現在でも窪みのまま残る竪穴住居跡の他に、様々な遺構が構築されていた。まずは、

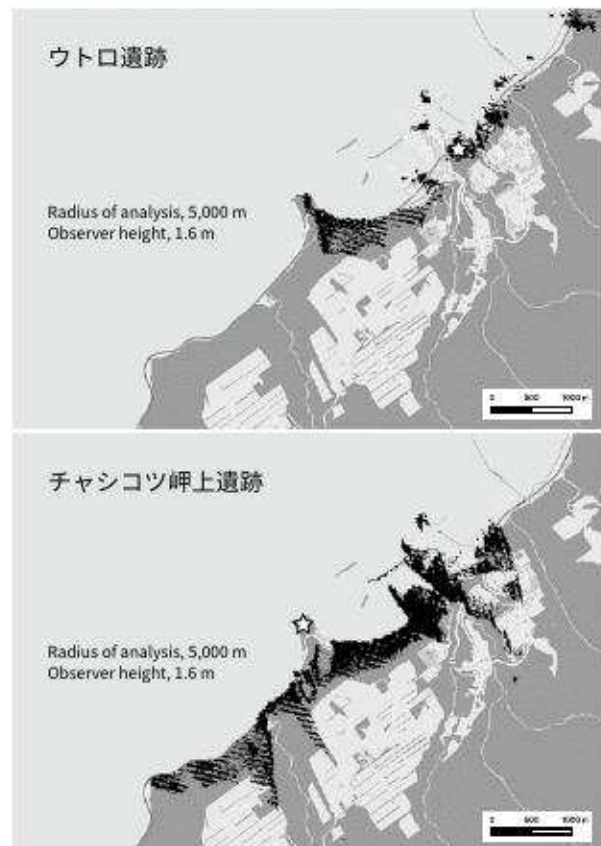


図1 遺跡からの眺望範囲



墓である。オホーツク文化の墓はこれまでに2基見つかり、1号墓は20歳前後の成人、2号墓は4歳前後の幼児のものであった。これらに共通する点は、上部に石積みを有し、下部の土坑に遺体が埋葬されている点、遺体の頭位が南西な点、石積みの下にオホーツク土器、刀子や針などの鉄製品、炊いた状態の炭化オオムギ、被熱したニシンの骨が副葬されていた点などが挙げられる。道具だけでなく、オオムギやニシンが加熱された後に副葬されている例はこれまでのところ知られておらず、注目に値する。

墓の他にも、石を敷きつめた配石遺構というものも見ついている。これには2つのタイプがあり、1つは平坦な土地を利用するもの、もう1つは廃絶された堅穴のくぼみを利用するものである。前者は、石の間から被熱したヒグマの歯や骨片など動物骨を多く伴うため、儀礼色が強い。一方、後者はオホーツク文化の堅穴のくぼみを利用して、トピニタイ文化の人々が構築したものであった。目的や用途は不明であるが、敷き詰められた石の間から大小様々な完形のトピニタイ土器が4個体出土しており、こちらも実用的な遺構とは捉えにくい。また、これらの遺構に用いられた石は元々チャシコツ岬の上部にはないので、外部から運び込まなくてはならない。1つ20 kgはある石を崖の上まで複数運び上げる行為は、それなりの人手と労力が必要だったと考えられる。しかしながら、墓や配石遺構など、多くの場面で石を利用し

ていることから、オホーツク人にとって必要不可欠な要素であることがわかる。

また、廃絶された堅穴のくぼみを利用するという点ではオホーツク文化期の廃棄場も同様である。集落の中央部に位置する22号・23号堅穴を被覆するように、大量の動物遺存体が堆積する場所があり、オホーツク土器の破片や壊れた骨角器なども見ついている。その内容は、ニシン科、タラ科、アイナメ属、サケ属といった魚類が大半を占め、その他に鳥類や哺乳類遺体も含むという構成であり、オホーツク文化終末期においても、変わらず海への依存度が高いままであることが確認できた。さらに、動物種や回遊する魚類から集落が通年で機能していたことが窺える点も重要である。

このように、大量の食料資源、多種多様な遺構という集落の内容だけを見れば、一般的な低地の集落に遜色ない充実ぶりである。また、1箇所に多数の堅穴住居、墓、廃棄層という集落要素が揃う例は意外にも少なく、モヨロ貝塚（網走市）や目梨泊遺跡（枝幸町）など、各地域の拠点的集落にみられる特徴である。よって、チャシコツ岬上遺跡もこれらと同様な拠点的集落の1つとして位置付けられる。

#### 4. 生活様式の変化

チャシコツ岬上遺跡の集落には、オホーツク文化の伝

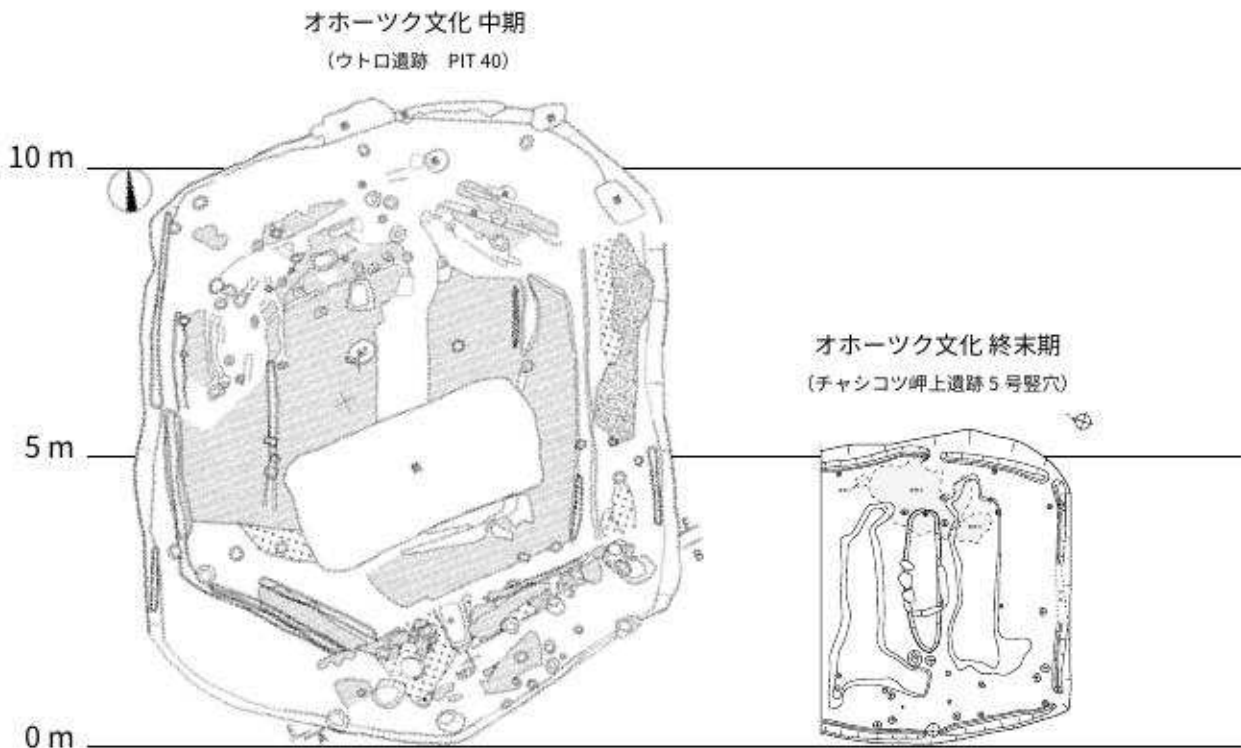


図2 堅穴住居規模の変化

統的な暮らしぶりの中にいくつかの変化が認められた。とくに、大きな変化が認められたのは竪穴住居である。

オホーツク文化の竪穴住居は大きいことで知られ、床面積の平均値73.74 m<sup>2</sup>は擦文文化の約3倍にあたる(天野2008)。しかし、時期が下るにつれて竪穴が小型化することは従来の調査成果からも明らかであり、チャシコツ岬上遺跡においてもその傾向を顕著に認めることができる。例えば、ウトロ遺跡のオホーツク文化中期の竪穴は長軸11 m規模の大型主体であり、PIT 40の床面積は約75 m<sup>2</sup>である。一方、チャシコツ岬上遺跡では5-8 m規模が全体の約7割を占め、オホーツク文化終末期の5号竪穴の床面積はわずか20 m<sup>2</sup>ほどであった(図2)。天野(2008)によると、一般的な床面積40 m<sup>2</sup>クラスであれば1棟に2核家族10名前後が居住したと想定されている。そうすると、その半分の床面積のチャシコツ岬上遺跡5号竪穴では親子2世代5人前後の暮らしということになる。これより、オホーツク文化終末期頃には、かなり核家族化が進行していたと考えられる。

また、竪穴住居に関しては規模の変化だけでなく、屋内の動物儀礼のあり方にも変化が認められた。オホーツク文化の竪穴住居では所定の位置にヒグマなどの頭部を主体的に集積した儀礼空間(以下、骨塚)がしばしば認められる。チャシコツ岬上遺跡も例によって屋内に骨塚が設けられていたものの、一般的なものと異なり、最重要視される位置(奥壁部)ではなく、それと相対する位置に複数の骨塚が残されていた。このように複数の骨塚を備えた竪穴住居跡のうち奥壁部の骨塚を欠く例はこれまでに知られておらず、動物儀礼の変化が窺える。一方、屋外では配石遺構から被熱したヒグマの歯が見つかり、屋内外で出土するヒグマ骨の部位が異なるため、屋内外の動物儀礼がリンクしていた可能性が考えられる。

ただし、動物儀礼が複数の家によって行われた可能性も指摘されているため(天野2003)、現段階では判断が難しい状況にあるのも事実である。そのため、オホーツク文化終末期に動物儀礼が変化し、その後どのようにしてトビニタイ文化へと受け継がれていったのかは今後も検討すべき課題としたい。

このほか、儀礼面では墓に関しても若干の変化が見受けられる。遺体の頭位について、モヨロ貝塚に代表されるような北西方向の伝統はなく、チャシコツ岬上遺跡では南西頭位をとっている。墓域の性格や地域差も検討する必要があるが、チャシコツ岬上遺跡と時期の重なるチャシコツ岬下B遺跡(斜里町)やトーサムポロ遺跡(根室市)A地区墓群も南西頭位である点は示唆的である。

以上、チャシコツ岬上遺跡の発掘調査成果や、そこか

ら見えてきた様々な変化を俯瞰したが、遺跡の位置付けを左右した最も重要な発見についても触れる必要がある。それは、神功開寶という古代銭貨の発見である。

#### IV. 神功開寶が示す古代の交流

先に触れたように、オホーツク文化全体の大きな変化として、8世紀後半以降に主な交流の相手が大陸側から本州側へと切り替わることが挙げられる。チャシコツ岬上遺跡が機能している8-9世紀頃は道央部や本州側との結びつきが強まる時期にあたり、それを象徴するように、神功開寶(765年初鑄)という奈良時代に律令国家が発行した貨幣が出土し、全国的な話題となった(写真2)。

神功開寶は、765(天平神護元)年初鑄の貨幣で、奈良時代から平安時代まで連続的に発行された皇朝十二銭の3番目にあたる。1枚の銭貨の発見がなぜそこまで話題となったかという点、これまでのところ北海道で皇朝十二銭が出土する例は極めて少なく、しかも、その分布は石狩低地帯のごく一部に限られていたためである(中世一括埋納銭は除く)。具体的には、恵庭市茂漁2遺跡の和同開珎(末期古墳)・茂漁8遺跡の隆平永寶(擦文前期)、千歳市ウサクマイN遺跡の富寿神寶(擦文前期)などが挙げられ、擦文文化や本州文化の遺跡からしか発見されていなかった。このうち、茂漁8遺跡とウサクマイN遺跡からはオホーツク土器も出土しており、当時、石狩低地帯は本州と道東の文物がクロスする地点であったという意見もある(種市ほか2001)。そのため、オホーツク文化の遺跡から皇朝十二銭が出土するというチャシコツ岬上遺跡の事例は、道央部を介して、オホーツク文化と古代日本との間に間接的な交流があった可能性を裏付ける形となったのである。

問題は、いかにして神功開寶が都・畿内から知床半島まで運ばれたのか、という点である。奈良時代には、古代日本の領域は東北北部まで広がり、北方の支配拠点として古代城柵が置かれていた。この古代城柵やその関連遺跡には中央から皇朝十二銭が運ばれており、いくつかの出土例が認められる。



写真2 チャシコツ岬上遺跡から出土した神功開寶



東北経営の中心地であった多賀城に関連する山王遺跡では、8世紀末から9世紀前葉頃の河川跡から、人面墨書土器、形代、斎串などの祭祀遺物とともに隆平永寶(796年初鑄)2点が出土しており、大祓などの律令祭祀の祭料のひとつと考えられている(宮城県教育委員会1996)。また、秋田城では城内の竪穴住居跡から和同開珎(708年初鑄)2点、秋田城外郭東門から城外に延びる推定大路の南側にあたる位置では和同開珎銀錢1点、政庁北側から富寿神寶1点が見つかった(秋田市教育委員会1978、1981、1991、1995)。さらに、萬年通寶5枚を埋納した胞衣壺も検出されており、秋田城でも祭祀に用いられていることがわかる(秋田市教育委員会1994)。

このように秋田城での出土が際立つこともあり、北海道への皇朝十二銭の流入は秋田城を経由した可能性が高い。というのも、『統日本紀』には「渡嶋蝦狄」(擦文人か)が秋田城へ朝貢に訪れるようすが表れており、9世紀までにはエミシに対する給付が秋田城の財政を圧迫するまでに増大していたとされる(養島2015)。おそらく、朝貢の際にエミシへ与えられた鉄製品や織物などとともに皇朝十二銭も北海道へ伝わったものと推察される。

神功開寶が北海道へ渡ってから知床半島に届くまでの経過は、北海道内の皇朝十二銭の出土分布からもわかるように、道央部の擦文人を介してオホーツク人の手に渡ったと考えられる(図3)。実際、チャシコツ岬上遺跡からは擦文前期の土器片が数点出土しており、擦文人と交流があったと考えられる。こうした外部との交流の主目的は刀子などの鉄製品の入手が想定され、チャシコツ岬上遺跡からも刀子や針などの鉄製品が他の遺跡に比べ多く出土している点は活発な交流を窺わせる。

また、秋田領域・石狩低地帯とオホーツク海側の古代の交流を示すものは、神功開寶だけではない。8世

紀後半-9世紀にかけて北海道で出土する須恵器の多くは秋田領域の窯跡群で生産されたと考えられるものであり、その出土量と分布から石狩低地帯と秋田領域を主体とする地域間で日本海ルートによる物流が展開していたと考えられている(鈴木2014)。さらに、9世紀後半に秋田県男鹿市の海老沢窯跡群・西海老沢窯跡群で生産されたと考えられる須恵器高台付皿がオホーツク文化の集落跡であるトーサムボロ遺跡(根室市)から出土している(写真3)。これは石狩低地帯を経由した秋田領域とオホーツク海側の交流を示す例であり、チャシコツ岬上遺跡の神功開寶が秋田経由で運ばれたことを補強するものである。

以上をまとめると神功開寶が辿った経路としては、人の動きに伴って都・畿内から秋田城へと運ばれ、エミシの秋田城への朝貢に対する給付に混ざって北海道石狩低地帯へと渡り、そして石狩低地帯の擦文人とオホーツク人の交流によってチャシコツ岬上遺跡へ到達したという1つの流れが想定できる。

わずか1枚の銭貨の発見ではあるが、複数の地域集団の結びつきによって、古代日本とその周辺がつながっていたことを示す要素となったといえよう。

## V. おわりに

チャシコツ岬上遺跡の発掘調査から、オホーツク文化の変遷や、隣接地域との交流の様子が明らかとなった。その結果として、国史跡として指定を受けたが、ここが最終到達点ではない。現在、チャシコツ岬上遺跡の調査面積は全体の1%程度に過ぎず、多くの遺構・遺物とともにいくつかの課題も解決されぬまま保存されている。今後の調査によって遺跡の内容解明が進むことで、史跡としての魅力も増すだろう。



図3 皇朝十二銭の出土地点



写真3 トーサムボロ遺跡(根室市)出土の須恵器



また、史跡内は国有保安林に指定されており、景観も含めて大きく現状が変更されることなく保全されてきた。しかし、近年はヒグマの冬眠穴や、シカの食害を受けた倒木の影響などで徐々に遺跡が侵食されているのも事実である。そのため、まずは遺跡の適切な保存方針を定めることが最優先である。その上で、来跡者の安全面に配慮した遺跡へのアクセス方法も検討しなければならない。また、近隣には天然記念物指定鳥類などの営巣も認められることから、野生動物との距離を保ちつつ、遺跡を見学可能にする工夫が求められている。

今後は早期の一般公開を目標に、史跡の保存と活用とのバランスを意識した、世界自然遺産知床を保有する町にふさわしい整備を進めてゆきたい。

## VI. 引用文献

- 秋田市教育委員会. 1978. 昭和52年度秋田城跡発掘調査概報. 秋田市教育委員会.
- 秋田市教育委員会. 1981. 昭和55年度秋田城跡調査概報. 秋田市教育委員会.
- 秋田市教育委員会. 1991. 平成2年度秋田城跡調査概報. 秋田市教育委員会.
- 秋田市教育委員会. 1995. 平成6年度秋田城跡調査概報. 秋田市教育委員会.
- 秋田市教育委員会. 1996. 平成7年度秋田城跡調査概報. 秋田市教育委員会.
- 天野哲也. 2003. クマ祭りの起源. 雄山閣.
- 天野哲也. 2008. 古代の海洋民オホーツク人の世界. 雄山閣.
- 白杵勲. 2005. 北方社会と交易—オホーツク文化を中心に—. 考古学研究52(2): 42-52.
- 熊木俊朗. 2011. オホーツク土器と擦文土器の出会い. 異系統土器の出会い. 同成社.
- 熊木俊朗. 2018. オホーツク海南岸地域古代土器の研究. 北海道出版企画センター.
- 鈴木琢也. 2014. 古代北海道と秋田の交流. 古代秋田に集った人々. pp. 47-54. 第29回国民文化祭秋田市実行委員会・企画委員会.
- 高橋健. 2002. 海に生きたオホーツク人. 北の異界古代オホーツクと氷民文化. pp. 80-89. 東京大学総合博物館.
- 高島孝宗. 2005. オホーツク文化における威信材について. 海と考古学. pp. 22-44. 六一書房.
- 種市幸生・田中哲郎・菊池慈人・山中文雄・遠藤昭浩・松田淳子. 2011. 千歳市ウサクマイN遺跡. (財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第156集.
- 平河内毅(編). 2018. チャシコツ岬上遺跡総括報告書. 斜里町文化財報告40. 斜里町教育委員会.
- 藤本強. 1981. 擦文文化—北海道の先アイヌ文化—. 地学雑誌90(2): 72-86.
- 箕島栄紀. 2015. 「もの」と交易の古代北方史. 勉誠出版.
- 宮城県教育委員会. 1996. 山王遺跡IV多賀前地区考察編. 宮城県文化財調査報告書第171集.

<sup>1</sup> オホーツク文化は土器編年や分布領域の変化等からオホーツク文化前期・中期・後期に分けられるが(白杵2005)、ここではこの3時期に加え、熊木による編年試案(熊木2018)の貼付文期後半(組成c)に該当する竪穴を持つ遺跡をオホーツク文化後期から独立させ、道東部におけるオホーツク文化終末期とした。



# 文献史料からみたオホーツク文化をめぐる交流

みのしまひでき  
養島 栄紀

北海道大学アイヌ・先住民研究センター 准教授

## 1. 文献史料から考えるオホーツク文化 I ——大陸側、中国史料

中国のいくつかの古典には、唐代の「流鬼」という北方民族についての記述がみられる（『通典』边防16北狄伝、『新唐書』北狄伝など）。「流鬼」は「三面」を海に囲まれた島の中に散居し、「靺鞨」（アムール川流域などに居住していた「女真」の祖先集団）と盛んに交易したとされる。当時、靺鞨は唐と通交しており、その誘いによって、流鬼は640年に「貂皮」を携えて唐に朝貢した。流鬼の使節（「王子」）は、唐から「騎都尉」の官職を得た。

この「流鬼」には、古くからカムチャツカ説とサハリン説とがあるが、サハリン説が有力である（加藤晋平1985『シベリアの先史文化と日本』；菊池俊彦1989『靺鞨と流鬼』『民族接触』など）。当時のサハリンはオホーツク文化の分布域であり、「流鬼」は主としてサハリンのオホーツク文化の人々にあたると思われる。

考古学の成果では、7世紀のオホーツク文化は、靺鞨の土器文化の影響を強く受けた土器を使用し（刻文期）、鉄製品などの多くを大陸から入手していたと考えられている。またこの時期、オホーツク文化は、道東の沿岸部や千島列島に進出したことが知られている。つまり、7世紀のオホーツク文化は、唐ともつながる靺鞨との通交に後押しされて分布を拡大していった可能性がある。

8世紀のオホーツク文化（沈線文・貼付文期）の遺跡でも、青銅製帯飾板・青銅製小鐸・軟玉製環・曲手刀子・鉄銚など、多くの大陸製品が確認される（菊池俊彦1995『北東アジア古代文化の研究』；白杵勲2004『鉄器時代の東北アジア』）。一方、この時期には蔵手刀などの本州製品の出土例も少なくない。8世紀のオホーツク文化は、黒水靺鞨を中心とする大陸の勢力と、本州・日本社会の双方との交流を有していたと考えられる。

ところが、道内の遺跡では9世紀の大陸系遺物がほとんど確認されず、大陸と北海道との交流が低調になったとみられる（山田悟郎・平川善祥・小林幸雄・右代啓視・佐藤隆広1995『オホーツク文化の遺跡から出土した大陸系遺物』『北の歴史・文化交流研究事業 研究報告』）。これは、7世紀末に建国された渤海が、8世紀半ば以

降、北方の靺鞨諸集団への支配を深めていったこととかわるであろう。『新唐書』黒水靺鞨伝には、「のちに渤海が盛んになると、靺鞨はみなこれに服属し、唐に朝貢しなくなった」とある。また、9世紀初頭の渤海王・大仁秀（在位818-830）は、「北方の諸族を征服し、渤海の領土を大いに広げる功績があった」（『新唐書』渤海伝）とされ、黒水靺鞨を含む北部靺鞨への軍事行動を積極的におこなった。このように、8世紀後半-9世紀初頭、北部靺鞨は渤海への屈服を余儀なくされていき、自由な活動を行うことが制約されるようになった（李成市1998『古代東アジアの民族と国家』）。

チャシコツ岬上遺跡の神功開宝（765初鑄）は、9世紀の層位から出土しており、オホーツク文化と大陸方面との交渉が低調だった時期にあたる。後述のように、この時期のオホーツク文化は、むしろ南に隣接する擦文文化との関係を強めていた。

その後、926年の渤海滅亡の前後から、靺鞨・女真は自律的な活動を再開していった（李1998前掲書）。これにより、10世紀以後には、アムール川中・下流域とサハリン・北海道方面との交流が再び開通したとみられる。網走市モヨロ貝塚から景祐元宝（1034初鑄）、稚内市オンコロマナイ貝塚から熙寧重宝（1068初鑄）が出土している。また、オホーツク海の北岸、古コリャーク文化のスレドニヤ湾5号住居からは皇宋通宝（1039初鑄）が検出されている（菊池1995前掲書）。これらの北宋銭は、オホーツク文化の遺跡の主たる存続年代とやや齟齬する点が気になるが、10世紀以後の女真の活動を背景として、環オホーツク海域にまで北宋銭が流入したことを示すものであろう。当時、サハリンのクロテン皮やハヤブサ（鷹・海東青）などが交易品となった可能性がある（養島2015『「もの」と交易の古代北方史』、2019『9～11・12世紀における北方世界の交流』『古代東ユーラシア研究センター年報』）。

この時期の大陸とサハリン・北海道との交易の実態にはまだ不明な点が多いが、アイヌ民族のサハリン・大陸方面への北進や、13世紀後半に始まるいわゆる「北からの蒙古襲来」への前史を考えるうえで軽視できない。

## II. 文献史料から考えるオホーツク文化2

### ——本州側、日本史料

『日本書紀』の斉明4-6年(658-660)にかけて、「越国守」(国宰)阿倍比羅夫による北航が記録されている。斉明4年紀では、阿倍臣の船団は秋田・能代・津軽の各地のエミシを「服属」させ、有間浜(津軽十三湊説が有力)まで到達し、「渡嶋蝦夷」を饗応したとされる。ここでの「渡嶋蝦夷」は、北海道のエミシ=擦文文化初期の人々に当たる可能性が高い(関口明2003『古代東北の蝦夷と北海道』など)。

斉明5年紀に、阿倍臣は「後方羊蹄」に「政所」「郡領」を置いたとされるが、これは北海道南部での出来事の可能性がある。大宝令以前には、「郡」にあたる行政単位は「評」であり、阿倍臣が設置したという北方の「郡」は、実際には「評」であった。「政所」(マツリゴトコロ)の本義は、貢納・奉仕のセンターと考えられている(吉村武彦1986「仕奉と貢納」『日本の社会史4』)。また、『続日本紀』霊龜元年(715)10月丁丑条の例では、陸奥国間村のエミシが、昆布の献上のため遠く国府まで往来する辛苦を訴え、間村に貢納の場所として「郡家」の設置を請うている。ここでの「郡」は、人民を戸籍で編成して管理する律令制的な政府とは考えられず、よりプリミティブな貢納の拠点であった蓋然性が高い(伊藤循1996「古代国家の蝦夷支配」『古代蝦夷の世界と交流』)。要するに、『日本書紀』に記載された北方の「政所」「郡」の実態は、阿倍比羅夫のようなミコトモチ(大王・天皇の使い)が派遣され、現地の人々から「貢納」を受け場であり、実質的に交易拠点にほかならなかった(養島栄紀2001『古代国家と北方社会』)。

斉明6年紀には、阿倍臣が「肅慎」とトラブルを生じて戦闘となり、その後、飛鳥で服属儀礼をおこなったことが記録される。「肅慎」は、中国古典に登場する伝説的な古代北方民族で、殷周交替に際して、周の武王に「楛矢石弩」(石鏃の矢)を献上したとされる(『国語』魯語、『史記』孔子世家など)。『日本書紀』の「肅慎」は、長く「ミシハセ」と訓まれてきたが、近年の研究で「アシハセ」が正しいことが認識されつつある(若月義小1999「アシハセ・肅慎考」『弘前大学國史研究』107; 児島恭子2003『アイヌ民族史の研究』)。欽明5年(544)12月条にも、佐渡島の御名部の碯に「肅慎」が来着・滞在したという伝説的な記事がある。倭・日本の支配層は、北東日本海方面においてその存在を伝聞した「アシハセ」の人々を、大陸系の北方民と考え、中国古典の「肅慎」の字をあてたのであろう。こうした『日本書紀』における「肅慎」の実態は、基本的にオホーツク文化の人々であった可能

性が高い(石附喜三男1986『アイヌ文化の源流』; 天野哲也2008『古代の海洋民オホーツク人の世界』など)。

斉明4年(658)是歳条には、阿倍比羅夫が「肅慎」から「生熊二・熊皮七十枚」を入手したとされる(この時期の『日本書紀』の記述は時系列に混乱がある)。「生熊二」は仔グマであろうから、オホーツク文化に顕著なクマ信仰・儀礼との関連を想像させる。斉明5年是歳条には、倭国に来た高句麗の使が、「熊皮」1枚を市で高く売りつけようとしたが、後日、70枚もの熊皮を見て驚愕したという逸話が載る。倭・日本において、北方の特産品が政治的・外交的に重要な意義を有したことを如実に示すエピソードである。

阿倍比羅夫の北航の実態は、のちのエミシ政策にみられるような、国家領域の拡大を意図するものではなく、遠隔地の集団と点々と接触し、貢納的な関係(交易)を広げようとするものであった(熊谷公男1986「阿倍比羅夫北征記事に関する基礎的考察」『東北古代史の研究』)。遠方の異民族の「貢納」をうながし、珍奇な特産品を集積することは、当時、国家建設の途上にあつた倭国にとって、大王・天皇の権威を著しく高めることにつながった(伊藤1996前掲論文)。また、中華思想・王化思想の原型ともいえる「肅慎の朝貢」も、王権の威信を増大するため政治利用された(養島栄紀2017「七世紀の倭・日本における「肅慎」認識とその背景」『古代国家と北方世界』)。

『続日本紀』養老4年(720)正月丙子条には、「渡嶋津軽津司従七位上諸君鞍男ら六人を靺鞨国に遣わし、其の風俗を観さしむ」という記事がある。従七位上は国司の掾クラスにあたり、おそらく「渡嶋津軽津司」は、出羽国府の下部組織に位置づけられて、青森-北海道南部の沿岸に点在する港湾拠点の巡回・交易を管掌した官司であろう。この「靺鞨国」の「風俗観察」について、大陸の渤海への遣使だとする意見も多いが、「靺鞨」は「アシハセ」と訓まれたことがわかっており(児島2003前掲書)、この時期の日本では、いまだ前代の「アシハセ」=オホーツク文化に対する認識や政策が継承されていた蓋然性が高い。むしろこの「津司」派遣は、オホーツク文化圏の調査を試みたものではないか(養島2001前掲書)。

以上のように、7世紀後半から8世紀初頭にかけての一時期、王権・国家は北東日本海沿岸に点在する拠点港に越・出羽から使者を派遣し、貢納(交易)を促そうとしていた可能性がある。しかし、こうした政策は、天平5年(733)12月、出羽柵の北進=秋田城造営によって大きく転換する。『続日本紀』宝龜11年(780)5月甲戌条は、出羽国に早くから「渡嶋蝦狄」が「来朝貢獻」して



いることを記し、秋田城への渡嶋エミシの「朝貢」が、8世紀半ばかそれ以前にさかのぼることを示唆する（関口明2003『古代東北の蝦夷と北海道』）。秋田城の設置によって、能代以北の港湾拠点に使いを派遣して交易するシステムは放棄され、渡嶋エミシの側が特産品を携えて秋田城に向く朝貢型交易の体制が成立したのである。

その後、『類聚三代格』延暦21年（802）6月24日太政官符は、出羽国に対して、「渡嶋狄ら」が秋田城への来朝の際にもたらす「雑皮」（さまざまな毛皮）について、「王臣諸家」の使者が競って「好皮」を買ってしまう行為を禁じている（関口2003前掲書）。当時の東北地方では、エミシの産物を求める王臣家・国司、富豪層らの「私的な」交易活動が顕在化していた（『類聚三代格』延暦6年（787）正月21日太政官符、「類聚三代格」弘仁6年（815）3月20日太政官符）。こうした状況下、秋田城では、渡嶋エミシとの国家的・儀礼的な交易に便乗して、王・貴族層による私的取引が比重を増していたのである。

『日本後紀』弘仁元年（810）10月甲午条には、陸奥国気仙郡に到着した渡嶋エミシが「当国の所管に非ず」とされている。これ以前に、律令国家は渡嶋エミシとの交渉を出羽国に一本化する方針を打ち出していたことがわかる。このことは、統縄文時代以来、8世紀まで本州北部-北海道のあいだに存在した多元的な交流ネットワークを解体し、北海道社会との関係を、秋田城を中心とする出羽国主体の交易システムに収斂する一因となったとみられる（養島2001前掲書）。

宝亀5年（774）にエミシの上京朝貢が停止されると（『続日本紀』宝亀5年正月庚申条）、陸奥・出羽においては、調庸物として取戻した狭布や米を京進せず、エミシを饗応する際の禄物や食料に充て、対価として各種の特産品を得る特殊な国制が成立する（鈴木拓也1998『古代東北の支配構造』）。秋田城跡では、「八月廿五日下狄糞料口二条口」と記した8世紀後半の木簡が出土しており、当時の秋田城におけるエミシへの饗応の様子を生々しく伝える（秋田城跡調査事務所編1992『秋田城出土文字資料集Ⅱ』、奈文研木簡データベース）。

9世紀後半の出羽国では、「歸来の狄徒毎年数千」という状況のもとで、「狄禄」としての狭布の不足が常態化し、国衙財政を圧迫する事態が生じていた（『類聚三代格』貞観17年（875）5月15日官符）。そこでは、渡嶋エミシへの狄禄も大きな比重を占めたであろうし、王臣家らによる私的取引の場で渡嶋エミシの手に渡る和産物も少なくなかったであろう。『日本三代実録』元慶3年（879）正月11日条には、「渡嶋の夷の首百三人、種類三千人を率いて秋田城に詣る」と、元慶の乱に際して、

渡嶋エミシによる秋田城への大規模な集団行動があったことがみえる。秋田城交易の定例化のなかで、日本の王・貴族層が北方の特産品への需要を増していくと同時に、渡嶋エミシの側も日本社会との交易への傾斜を強めていたことが推察される（中村英重1989『渡嶋蝦夷の朝貢と交易』『古代の東北—歴史と民俗—』）。こうした事情は、瀬川拓郎氏が9世紀末-10世紀に推定する交易適応型の生活様式＝「アイヌ・エコシステム」の成立（2005『アイヌ・エコシステムの考古学』）と関連するかもしれない。また、秋田城を窓口とする古代日本との恒常的な通交は、渡嶋エミシ社会の連帯（社会統合・階層化や自他認識の形成）に作用した可能性も考えられる（養島2001前掲書）。

元慶の乱を転機として、9世紀末-10世紀には、新たに青森県域に各種の生産・交易拠点が成立していく（五所川原市の須恵器窯群など）。秋田城は朝貢型交易の中心拠点としての役割を終え、北海道との交易の主体は本州北端の地に移行する。この時期には、「外が浜」や十三湊（岩木川河口）を拠点とする中世的な北方交易の萌芽がみられ、交易の機会が多様化し、規模もさらに増大していくことになる。

### III. アザラシ皮製品の流通からみた オホーツク文化をめぐる交流

オホーツク文化をめぐる交流を文献史料から考える材料として、アザラシ皮製品がある。アザラシ皮の日本の文献史料への確実な登場は9世紀末-10世紀で、「アザラシ」（「阿多羅之」「阿左良之」）のほか、「水豹」とも表記された。『文選』所収の「西京賦」（後漢の張衡（76-139）による永元年間（89-105）の作）には、「昆明池」（武帝が雲南の滇池をまねて長安の西に造成した人工池）での天子の遊興の場面に、各種の水産物とともに「水豹を楮す」の字句がみえ、後述のように10世紀成立の『倭名類聚抄』はこれをアザラシと解釈している。もとより「西京賦」は文学的修辞を駆使した作品であり、この「水豹」が生物としてのアザラシを厳密に指すとは限らないが、遅くとも後漢以前に「水豹」という漢語が成立していたことがわかる。

「水豹」にふさわしい文様をもつのは、ゴマフアザラシ、ゼニガタアザラシ、ワモンアザラシ（フイリアザラシ）であろう。ゴマフアザラシは移動性が高く、冬季に北海道沿岸（南西部を除く）に南下し、おもに流水上で繁殖して、流水が消滅すると夏季には北に戻る。ただし近年、アザラシ猟の衰退による個体数の増加で、礼文島以南、積丹半島方面など日本海沿岸での長期滞在傾向が生じて

いるという。ゼニガタアザラシは定住性が高く、襟裳岬を西端として、厚岸-根室-北方四島など、太平洋沿岸に分布する。ワモンアザラシは主としてオホーツク海沿岸に少数が南下する(小林万里2015「北海道におけるアザラシ類の生態」『勇魚』62;北海道編2015『北海道アザラシ管理計画素案』)。

これらのアザラシ類の主たる分布は、積丹半島付近や襟裳岬周辺を除けば、おおむねオホーツク文化の活動した範囲と重なる。海獣狩猟民としてのオホーツク文化の性格はよく知られており、古代日本にもたらされたアザラシ皮製品は、擦文文化がオホーツク海沿岸に拡散する10世紀以前においては、オホーツク文化が主たる生産者であったとしてよからう。

日本史料では、従来、『新儀式』(応和3年(963)頃成立)が「水豹」の初見として知られてきたが、最近、『紀家集』(紀長谷雄の詩文集)所収の「競狩記」に、アザラシ皮製品に関する記述があることが指摘された(武廣亮平2017「正倉院収蔵の「アザラシ」の毛皮」『日本歴史』834)。「競狩記」は、昌泰元年(898)10月20日、醍醐天皇に譲位した直後の宇田上皇による遊獵行幸の記録であり、帯同した人々のいでたちについて、「(前略)若帯剣者、参議豹皮□鞘、五位以上用虎皮、六位用北豹皮(土俗云、阿多羅□)(後略)」とある。

「□鞘」は、「後鞘」(尻鞘=刀剣の鞘の先端に装着するアクセサリ)とみられる。「北豹」は、豹文をもつ北方産の獣皮の意味であろう。「阿多羅□」は「阿多羅之」(『西宮記』臨時4)であろうから、9世紀末には、「北豹」=「アザラシ」という認識があったことがわかる。『西宮記』臨時4は、六位の尻鞘として「阿多羅之」を用いるとする。公卿は「豹」、四位・五位は「虎・竹豹」とされており、「競狩記」の記述とほぼ共通する。そのほか、『師遠年中行事』(11世紀成立)にも、小朝拝の際の「六位衛府」の装備に「水豹尻鞘」が規定されるなど、「アザラシ皮の尻鞘は10世紀以降衛府の六位官人が用いるものとして定着していた」のである(武廣亮平2006「古代・中世前期のアザラシ皮と北方交易」『史叢』74)。そのほか、諸史料にみえるアザラシ皮製品の用途をまとめると、前記の「後鞘(尻鞘)」、鞍を固定する馬具の「鞆」(下鞍)、乗馬時の泥よけである「泥障」、鷹飼の「腹纏」などが確認される。

上記とは別に、アザラシ皮製品に関連して注目されるのが「独犴皮」である。『延喜式』(8-9世紀の単行法を集成して10世紀に編さんされた法典)の民部下・交易雑物に、「陸奥国<葦鹿皮・独犴皮数は得るに随う。砂金三百五十両。昆布六百斤。索昆布六百斤。>」、「出羽国<熊皮廿張。葦鹿皮。独犴皮数は得るに随う>」とある。

「独犴皮」は、「どっかん」=アイヌ語の“tukar”(トゥッカ

=トゥッカリ=アザラシ)の可能性が高い(武廣亮平2004「独犴皮」についての一考察」『日本歴史』678)。「独犴皮」に関して、『延喜式』弾正台には馬具の「鞆」としての用途がみえる。また、『日本後紀』弘仁元年(810)9月乙丑条に「独射犴皮」がみえ、9世紀初頭には流通していたことがわかる。ちなみに、2006年の調査で、正倉院蔵の下鞍がアザラシ皮と鑑定され、8世紀の日本におけるアザラシ皮利用の物証として注目されたが、2009年以後の調査ではこの結果が否定されている(武廣2017前掲論文)。

『倭名類聚抄』(承平年間(931-938)成立)毛群部には、「葦鹿」「独犴」「水豹」が併記されている。「独犴」については「唐韻云、犴(中略)胡地野犬名也」とあり、「水豹」については「文選西京賦云、搯水豹(和名、阿左良之)」とある。『倭名類聚抄』は「独犴」と「水豹」とを別の動物として扱うが、「独犴」がアイヌ語の“tukar”に由来する外来語とすると、古代日本では、「独犴皮」の実態を正確に把握しておらず、認識に混乱があった可能性がある。「独犴皮」は、10世紀前半まで「胡地の野犬」説が混在し、しかも「数は得るに随う」とあるように、まとまった数を定量的に入手することが困難な毛皮であった。これは、アザラシ皮が、日本古代国家の領域外である北海道島の産物であり、その入手があくまで渡嶋エミシ(擦文文化の人々)の側の都合に左右されていたためであろう。その背景には、8-9世紀において、アザラシ皮が、オホーツク文化圏から擦文文化圏を介して間接的・限定的にしか入手されない産物だったことがあるのではないかと。

その後、10世紀前後を境に、アザラシ皮の表記は「独犴」から中世に一般的な「水豹」「アザラシ」へと変わる。両者を併記する『倭名抄』の記述は、ちょうどその過渡期の様相を示すのであろう。武廣氏は、こうした表記・認識の変化が、「交易体制の何らかの変化」にともなって生じた可能性を示唆している(武廣2004、2006前掲論文)。

10世紀には、擦文文化によるオホーツク海沿岸への進出が指摘されている。その要因として、近年、交易品としての鷲羽の意義に注目する有力な見解があるが(瀬川拓郎2007『アイヌの歴史』など)、ここでは、従来から「交換商品としての海獣類の毛皮等の海産物の直接的獲得」をめざしたという指摘(山浦清1983「オホーツク文化の終焉と擦文文化」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』2)があることを想起したい。つまり、8-9世紀まで、アザラシ皮製品はおもにオホーツク文化が生産し、擦文文化の手を介して秋田城など陸奥・出羽で限定的に入手される産物であったが、10世紀には擦文文化の

オホーツク海沿岸への進出により、擦文文化が主体的にアザラシ皮を生産するようになり、本州との交易の機会や供給量も著しく増大した蓋然性がある。その結果、日本社会では、従来、アイヌ語由来の「独犴」として漠然と把握してきた毛皮獣に対する認識が深まり、これを漢語の「水豹」に同定し、また「阿多羅之」として認識するようになったのではないかと推定が正しいとすれば、アザラシ皮製品の表記をめぐる異同・変遷は、古代日本とオホーツク文化圏の関係の実態を考えるうえで参考になるといえる。長い間、日本の古代王権・国家にとってオホーツク文化の人々との接点は、擦文文化を介した間接的な交流が大半であり、限定的な情報しか得られない場面も多かったと推察されるのである。

その後、「水豹皮」は、11世紀後半の清原氏（『奥州後三年記』上、永保3年（1083）秋）や、12世紀の奥州藤原氏（『台記』任平3年（1153）9月14日条、『吾妻鏡』文治5年（1189）9月17日条）など、奥州勢力の特産品としてしばしば登場する。1189年の奥州合戦の翌年には、源頼朝が「水豹毛泥障」といういでたちで入京している（『吾妻鏡』建久元年（1190）11月7日条）。アザラシ皮は、奥州藤原氏を滅ぼした鎌倉殿＝頼朝が、北海道につながる交易の権益を掌握したことの象徴として政治利用されたのである（藤田明良2003「都にやってきた海獣皮」『北太平洋の先住民交易と工芸』）。

#### IV. 古代北方世界における銭貨流入の背景と意義

近年、北海道において日本古代銭貨の出土例は増加しつつある。和同開珎（和銅元（708）初鑄）が恵庭市茂漁2遺跡から8点、神功開宝（天平神護元（765）初鑄）が斜里町チャシコツ岬上遺跡から1点、隆平永宝（延暦15（796）初鑄）が恵庭市茂漁8遺跡から1点、富寿神宝（弘仁9（818）初鑄）が千歳市ウサクマイN遺跡から2点、それぞれ出土している。

エミシの上京朝貢・地方官衙朝貢時には、叙位・賜禄のなかで銭貨が入手された可能性がある。北海道出土の古代銭貨は、秋田城での儀礼で渡嶋エミシが直接入手したか、エミシ社会相互の交流で北海道に渡ったかであろう。

チャシコツ岬上遺跡での神功開宝の出土は、オホーツク文化の遺跡からの初の出土例として注目されるが、あわせて留意されるのは、上記の古代銭貨の出土地が、オホーツク式土器の南下の事例とよく重なることである（養島2015前掲書）。富寿神宝を出土した千歳市ウサクマイN遺跡から貼付文期の、隆平永宝を出土した恵庭市茂漁8遺跡からは刻文期のオホーツク式土器（模

倣？）が出土している。このことは、オホーツク文化、擦文文化、本州社会の三者が、擦文文化を介してゆるやかなネットワークで結ばれていたことを示唆する。つまり、道央の擦文社会を中継して、オホーツク文化圏から陸海獣皮などがもたらされる一方、その対価である和産物がオホーツク社会側に流入したのであろう。すでに7世紀末には、「越の度嶋の蝦夷」（渡嶋エミシ）と「肅慎」がともに朝貢して「錦の袍袴・緋紺袴・斧等」を得ている記事があり（『日本書紀』持統10年（696）3月甲寅条）、擦文文化とオホーツク文化との共同行為は早くからあったと推察される。

こうした連携は、のちにオホーツク文化が擦文文化と接触・融合し、トピニタイ式土器が形成されていく前提となった可能性もある。最近、オホーツク文化と擦文文化の接触・融合は、必ずしも擦文文化による一方的な同化ではなく、オホーツク文化の担い手による主体的な文化変容としての面があったことが指摘されている（大西秀之2009『トピニタイ文化からのアイヌ文化史』；榊田朋広2016『擦文土器の研究』）。

では、これらの銭貨の現地社会での機能・意義はどうであったろうか。奈文研の和同開珎出土遺跡データベースを参照すると（表1）、北海道-東北における和同開珎の出土例は21遺跡を数えるが、中世備蓄銭を除外すれば13遺跡41点に過ぎない。また、秋田城を例外として（秋田城では和同銀銭も出土）、城柵・官衙での出土例が意外に少ない。むしろ末期古墳からの出土例が多く、副葬品としての意味合いが強い。

こうした銭貨の機能について、八木光則氏（1992「和同開珎と蝦夷」『岩手史学研究』75）は以下のように分類する。(1) 流通貨幣：近畿とその周辺にはほぼ限定。(2) 鎮壇具：玉や鏡、金銅製品とともに使用。興福寺金堂基壇、靈安寺塔心礎など。(3) 厭勝銭：鎮壇具・袍衣壺や火葬墓に埋納されたもの。うまや遺跡（福島県須賀川市）では和同開珎3点が袍衣壺から出土。秋田城でも万年通宝の袍衣壺からの出土例あり。(4) 地域首長の権威の象徴：刀剣・帯金具・勾玉などの威信財とともに末期古墳に副葬など。

古代北海道社会での銭貨の機能は、上記の分類では基本的に(4)であろう。宗教的・呪術的な意味合いも考慮すべきかもしれないが、いずれにせよ日本に由来する流通貨幣としてではなく、地域独自の社会的・文化的背景のもとで受容されたことが明らかである。また、古代の北海道やオホーツク海沿岸部には、日本古代銭貨の出土の一方で、I.に触れたように北宋銭などの大陸製品も流入しており、オホーツク文化や古代北海道の歴史を、日本との関係だけでとらえるのは一面的である。



むしろ、一貫して日本古代国家の領域の外部であり、それゆえにユーラシア東部の境界領域のひとつとしての性格を示した点に特徴がある(鈴木靖民1996「古代蝦夷の世界と交流」『古代蝦夷の世界と交流』など)。こうした

広域史的な視座は、長期的な過程としての「アイヌ史」を、より多様に変化に富んだものとして描きなおすうえでも重要であろう。

表1 和同開珎出土遺跡データベース(奈良文化財研究所)より抜粋

地域または府県	番号	遺跡出土地名	所在地	旧国名	遺跡・出土地の性格	立地	時期	和同開珎枚数	皇朝銭総枚数
北海道・東北	1	茂漁2遺跡	北海道恵庭市柏木茂漁川左岸	渡嶋	古墳群	河岸段丘	8C後-9C前	8	8
北海道・東北	2	志海苔出土銭	北海道函館市志海苔町247番地	渡嶋	備蓄銭	海岸	14C-15C?	1	15
北海道・東北	3	尻八館遺跡	青森県青森市大字後洞字後洞山	陸奥国	城館跡	山地	14C-16C	1	1
北海道・東北	4	奥内地区出土古銭	青森県青森市大字奥内	陸奥国	備蓄銭	沖積地	14C-15C?	1	2
北海道・東北	5	丹後平(1)遺跡	青森県八戸市大字根城字丹後平	陸奥国	古墳群	段丘上	8C前葉-中葉	1	1
北海道・東北	6	猿賀出土古銭	青森県南津軽郡尾上町大字猿賀字池上	陸奥国	備蓄銭	沖積地	中世(14C-15C?)	1	1
北海道・東北	7	太田蝦夷森遺跡	岩手県盛岡市上太田第14地割字蝦夷森	陸奥国	古墳群	沖積段丘	8C	1	1
北海道・東北	8	熊堂古墳群	岩手県花巻市上根子字熊堂	陸奥国	古墳群	沖積段丘	8C	10	10
北海道・東北	9	猫谷地遺跡	岩手県北上市上江釣子猫谷地	陸奥国	集落遺跡	河岸段丘	8C	4	4
北海道・東北	10	縦街道古墳群	岩手県胆沢郡金ヶ崎町大字西根縦街道南	陸奥国	古墳群	河岸段丘	8C	1	1
北海道・東北	11	河崎柵擬定地	岩手県一関市川崎町門崎字川崎	陸奥国	集落	河川の自然堤防上	8C後半	2	2
北海道・東北	12	長根I遺跡	岩手県宮古市千徳第2地割字長根61-2	陸奥国	古墳群	丘陵地	8C前半	1	1
北海道・東北	13	うまや遺跡	福島県須賀川市中宿、崩面地内	陸奥国	集落・駅家推定地	河岸段丘	8C前半	12	12
北海道・東北	14	洞向I遺跡	秋田県秋田市金足小泉字洞向	出羽国	火葬墓?	砂丘台地	不明(古代?)	3	3
北海道・東北	15	秋田城跡第21次	秋田県秋田市寺内字焼山	出羽国	城柵	独立丘陵	9C	1	1
北海道・東北	16	秋田城跡第54次	秋田県秋田市寺内字鷗ノ木	出羽国	城柵	独立丘陵	8C末-9C初頭	1	1
北海道・東北	17	秋田城跡第62次	秋田県秋田市寺内字鷗ノ木	出羽国	城柵	独立丘陵	古代	1	1
北海道・東北	18	大久保	秋田県由利郡鳥海町下川内字大久保	出羽国	備蓄銭	段丘上?	14C-16C?	1	1
北海道・東北	19	高木	山形県天童市高木	出羽国	備蓄銭	不明	不明	1+	1+
北海道・東北	20	二色根古墳2号墳	山形県南陽市赤湯二色根字南京	出羽国	古墳群	山腹	7C-8C	2	2
北海道・東北	21	立林古墳	山形県東置賜郡高島町大字高島字立林	出羽国	古墳	山腹	8C?	1	1



# 古代城柵秋田城跡と北方世界

いとう たけし  
伊藤 武士

秋田市立秋田城跡歴史資料館 事務長

## I. 古代城柵とその地域性

7世紀から9世紀にかけて、古代律令国家の支配拠点として東日本に古代城柵が造営された。東日本の古代城柵は、蝦夷や柵戸などの移民の支配統括を目的として、越後（越）、出羽、陸奥国北半に設置された軍事・行政機関である。城柵は段階的に北進し、設置後には建郡が行われた。律令国家は城柵の設置により、蝦夷社会に直接的に律令支配を拡大し、朝貢・饗給により支配地域外の蝦夷集団の把握、間接的支配を行おうとした。律令国家にとって対蝦夷政策を具現化した存在が、古代城柵といえる。

古代城柵は、東北各地で調査され、実態解明が進んでいる。調査により明らかとなった古代城柵の立地や基本プラン、区画施設や城内外施設などから把握される機能とその変化は、造営や改修段階における設置地域で

の律令国家の対蝦夷政策その変化を反映している。

太平洋側の陸奥国域における段階的かつ比較的密な城柵設置と面的支配の拡充に対し、日本海側の越国・出羽国域においては、海岸沿いの平野ごとに一気に北進する点的進出と周辺支配の傾向が認められ、それは特に城柵設置が開始された7世紀後半から8世紀前半に顕著である。

日本海側の城柵では地域性として、海を通じたより広域、より北方の蝦夷からの朝貢や蝦夷に対する饗給・斥候などの役割が、実質的かつ面的な律令制支配より重視されていたと考えられる。

日本海側の出羽国に位置する秋田城は、現在確認されるなかで最北の古代城柵であり、日本海側の地域特性が顕著に示されている城柵である。

## II. 古代国家と北方世界

秋田城で特に重視された古代国家と北方世界と交流・交易の歴史は、史料上は秋田城以前の7世紀代（飛鳥時代）に遡る。律令国家本格進出前に日本海側において阿倍比羅夫の北征が行われ、齊明天皇4年（658）には、鵜田浦において、鵜田・淳代の2郡の蝦夷、淳代・津軽の郡領を定めている。また、齊明天皇4年（658）から齊明天皇6年（660）には、秋田よりもさらに北方の渡嶋と推定される地において「肅慎」（オホーツク文化の人々か）に接触し、交戦した記録が残っている。



図1 東日本の古代城柵



写真1 秋田城全景



さらに養老4年(720)には渡嶋・津軽津司の官人を  
もろのつこく  
 靺鞨国に派遣する記録があり、津軽(青森)や渡嶋(北  
 海道)方面の津(港)を管轄する役所がすでに存在して  
 いたことがわかる。そして、その津司は秋田にあった可  
 能性が高い。

それらの史料から、古代律令国家が、渡嶋から大陸  
 を含めた北方世界の状況把握とそこに至る海上交通路  
 と地域集団の掌握に努めていたことがわかる。

8世紀(奈良時代)になり、和銅5年(712)には出羽  
 国が建国され、さらに天平5年(733)に山形県の庄内  
 地域から秋田地域に100 km北進して出羽柵が遷し置か  
 れ、最北の古代城柵、後の秋田城が造営されるのである。  
 この時期に古代律令国家は日本海側における北進、領  
 域支配の拡大を本格化させており、渡嶋や大陸を含め  
 た北方世界と古代国家との関係性に変化と画期があっ  
 たと考えられる。

### III. 最北の古代城柵秋田城の実態

最北の古代城柵秋田城は、天平5年(733)に「出羽  
 柵」として創建され、8世紀の中頃に「秋田城」と改称さ

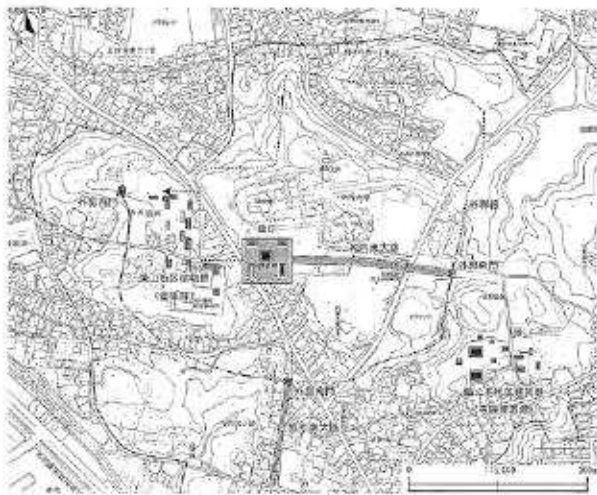


図2 秋田城跡全体図



写真2 復元された外郭東門と築地塀

れている。発掘調査の成果によりその後10世紀中頃ま  
 で古代城柵として機能したことが明らかとなっている。城  
 柵の基本的機能である行政・軍事機能、そして蝦夷の  
 朝貢とそれに対する饗給機能を持っていたことが、出土  
 遺物や遺構により、具体的に把握されている(註1)。

最北の城柵であるにもかかわらず、都城をモデルとし  
 た政庁と外郭からなる二重の基本構造や、壮麗な外観  
 の築地塀や瓦屋根、付属寺院など、古代律令国家を象  
 徴するプランや施設が徹底して採用されている。

さらに、最北の城柵として蝦夷社会に接し、北方や大  
 陸への窓口でもあった秋田城には、他の城柵とは異なる  
 形で、外交交流施設の機能、広域への饗給や交易のた  
 めの物資集積管理の機能、生産施設などの特徴的機能  
 が付加されていたことが明らかになっている(註2)。

秋田城における基本的な機能である行政機能につい  
 ては、戸籍などの行政文書の漆紙文書や木簡などの豊



写真3 狄饗料木簡



写真4 秋田城跡出土銭貨(左:和同開珎銀銭・右:富寿神寶)



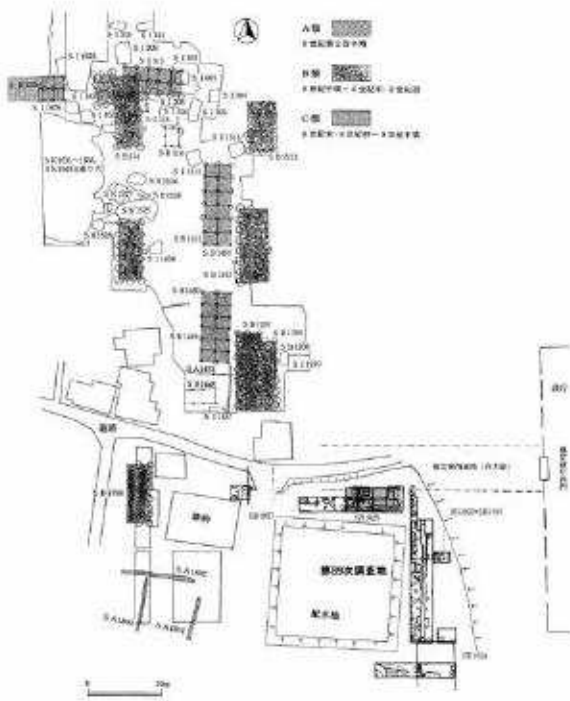


図3 焼山地区建物群(倉庫群)配置図

富な出土文字史料により裏付けられている。さらに城内出土の国府関連漆紙文書類の詳細な検討から、奈良時代には出羽国府としての機能も付加されていたと考えられる。

また、軍事機能については、武器、武具類に加え、秋田城への武器の集積管理を示す器状帳様漆紙文書や、鎮兵や軍団兵士の存在を示す木簡や墨書土器などが出土しており、蝦夷に対する最前線の軍事拠点としての機能も明確に持っている。

また、和同開珎銀銭などの律令国家が铸造した貨幣、万年通宝5枚を入れた胞衣壺、人形や人面墨書土器などの被いに用いる律令的祭祀遺物や万葉の歌木簡などが出土しており、畿内から直接的に文物や文化がもたらされている。

最北の城柵として特に重要な朝貢と養給の機能に関して、秋田城跡からは「秋養料」と記された第71号木簡が出土している。その8世紀末頃の荷札木簡は、送り先の秋田城、つまり城柵において、朝貢に訪れた北に住む蝦夷である「秋」に対し、位階や禄物を与える養給が行われていたことを明確に示している。

蝦夷の朝貢は、一方で律令国家間との交易活動としての側面を持っている。北方からは、馬、毛皮(クマ・アザラシなど)、鷹の羽、昆布などがもたらされ、秋田城を介し都にもたらされたと考えられる。

秋田城跡の城内施設には、他の城柵にはない大規模な城内倉庫群が確認されている。城内西半部の焼山地

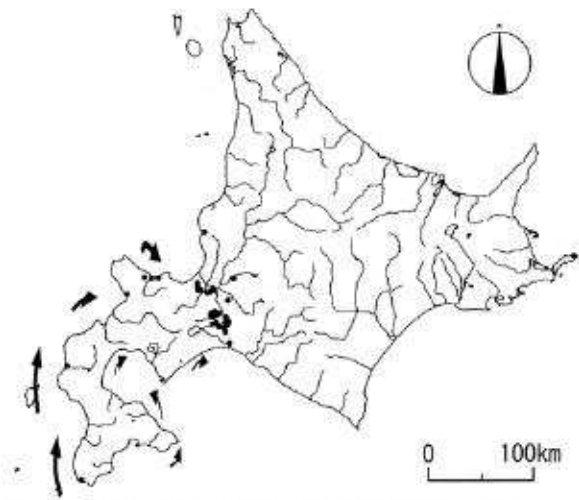


図4 北海道における須恵器の分布(8世紀後半-9世紀)

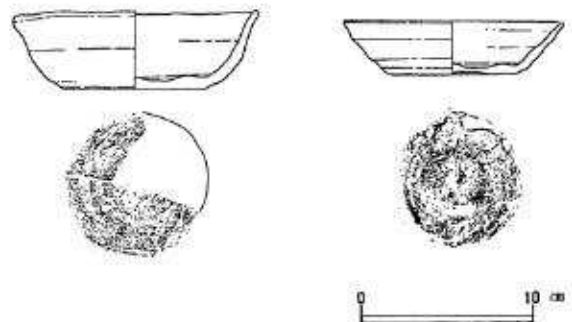


図5 千歳市美々8遺跡出土須恵器

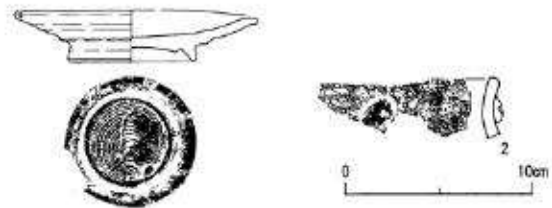


図6 根室市トーサンボロ湖周辺竪穴群出土須恵器とオホーツク土器

※図4-6 鈴木2016より転載

区建物群の規模は南北120 mを超え、8世紀から9世紀にかけて倉庫群として継続的に機能している。城内に継続して大規模な倉庫群を伴う城柵は数少なく、最北の城柵として、北方のより広域の蝦夷への養給や貢納物収納のための物資集積管理機能が、特に強化されていたことを示している。

律令国家の支配領域外の北方蝦夷集団との朝貢関係や交易の実態については、どうであったのか。それは秋田城と北海道道央部との事例から知ることができる。

北海道石狩平野の札幌市や千歳市周辺の集落においては、8世紀第4四半期から9世紀第1四半期の年代を中心とする秋田城周辺窯生産の須恵器が出土している。千歳市の美々8遺跡や末広遺跡では、当該期の須恵器坯のうちほとんどを秋田城周辺窯産が占めており、他地

域の須恵器の混入がほとんど認められない状況が把握されている(註3)。このことは、道央部の蝦夷集団が他地域の蝦夷集団を通さず、直接的に秋田城との朝貢関係を有していたこと示唆している。

『類聚三代格』には、延暦21年(802)に出羽国において渡嶋の狄と私的に交易することを禁ずる記録が残されている。律令国家北辺部の城柵における渡嶋などの北方蝦夷集団との朝貢饗給関係に基づく北方交易は、8世紀後半以降より活発化し、最北の城柵である秋田城の北方蝦夷社会に対する影響もまた、強くなっていった



写真5 古代水洗廁舎発掘状況

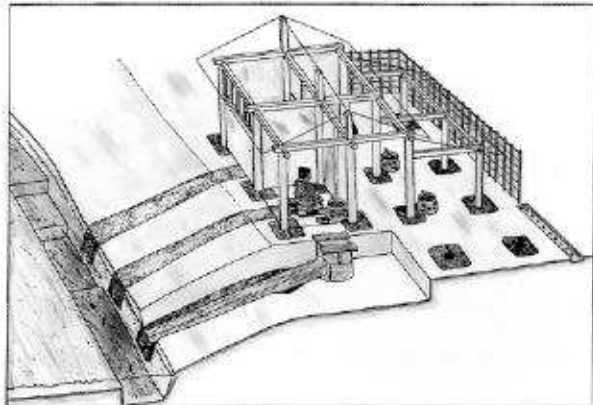


図7 古代水洗廁舎推定復元図

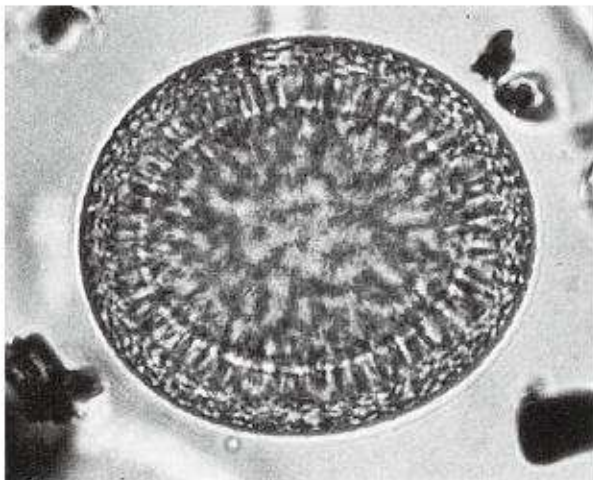


写真6 沈殿槽検出有鉤条虫卵

と考えられる。

秋田城と渡嶋方面との交易は、その後、9世紀後半以降も続くことが、須恵器の流通から明らかとなっている。秋田県男鹿市若美の海老沢窯跡群は9世紀後半に操業している須恵器窯であり、その製品である須恵器壺や壺は余市町大川遺跡などで確認されている。さらに須恵器高台皿が、根室市のトーサンボロ湖周辺竪穴群からオホーツク式土器と共伴して出土している。その交易ルートは、道央部を介し、道東部にまで広がり、道東部も古代律令国家と繋がりを持っていたと考えられる。

#### IV. 古代律令国家の北の窓口・秋田城

最北の城柵として北方蝦夷社会に接していた秋田城には、さらに、特徴的な外交交流施設としての機能までも付加されていた。

秋田城城外南東の鶴ノ木地区において、寺院兼客館(迎賓館)の建物群が確認され、その北東端の沼地岸辺から8世紀後半の古代水洗廁舎跡(トイレ)が発見されている。

水洗廁舎跡は、掘立柱建物、便槽、木樋(暗渠)、沈殿槽(浄化槽)、目隠し塀で構成されている。建物跡の中に3つの便槽が配置され、そこから沼地側へ木樋が埋設され、その先端の沼地部分には沈殿槽が掘られている。沈殿槽からは、使用後の始末に使用した約150点の篝火(クソベラ)が出土し、堆積土からは未消化の種実や糞虫の遺体、寄生虫卵が検出されている。

沈殿槽堆積土の自然科学分析では、豚食の習慣のある人間へ寄生する有鉤条虫と判断される寄生虫卵が検出されている。金原正明氏は、豚を常食とする食習慣は当時の日本にはなく、豚の飼育が盛んな中国大陸などに見られる食習慣であること、有鉤条虫卵が福岡市の中国大陸や朝鮮半島からの来航者に対する迎賓館施設である鴻臚館跡の便所遺構からも検出されていることなどから、豚食習慣のある大陸からの外来者の使用を指摘している(註4)。

大陸との交流を見た場合、律令国家は8世紀から9世紀にかけて大陸東北部の渤海国と外交関係を持ち、8世紀代には神亀4年(727)の第1回使から第13回使までのうち、出羽に到着したものが6回を占めており、渤海国から出発する正使はほとんどが出羽国に到着している(註5)。そしてその渤海使の来航時期と水洗廁舎および客館建物群の増設時期とは一致しており、また、8世紀末以降に出羽国への来航がなくなると水洗廁舎を含む客館建物群は機能を停止しているのである。

出羽国の国府であった秋田城は、到着した渤海使節



図8 渤海使推定航路

古畑 1994より転載

の対応を行った可能性が高く、渤海使節などの大陸からの来航者が、鶴ノ木地区建物群を迎賓館施設として使用し、水洗厠舎を使用した可能性が高いと判断される。

客館および特異な水洗厠舎は、壮麗な外観と合わせ、秋田城の外交施設としての機能を示唆している。

最北の城柵として、朝貢と饗給の機能を持つとともに、北方世界との交流・交易関係が裏付けられ、さらに外交施設としての機能も付加されていた秋田城は、まさに、古代律令国家の「北の窓口」として位置づけられるといえる。古代国家および古代城柵と北方世界との関係性やその実態の把握において、秋田城は極めて重要な遺跡なのである。

註1 伊藤武士 2006『日本の遺跡12 秋田城跡』

註2 伊藤武士 2016「古代城柵秋田城の機能と特質」『北方世界と秋田城』

註3 鈴木琢也 2016「擦文文化の成立過程と秋田城交易」『北海道博物館研究紀要1号』

註4 金原正明・金原正子 1996「秋田城跡便所遺構における微遺体分析」『平成七年度秋田城跡調査概報』

註5 古畑徹 1994「渤海・日本間航路の諸問題—渤海から日本への航路を中心に—」『古代文化』46巻8号





チャシコツ岬上遺跡国史跡指定記念シンポジウム  
「オホーツク文化と古代日本」

2019年11月9日発行

編集 平河内 毅

発行所 斜里町立知床博物館

〒099-4113北海道斜里郡斜里町本町49

発行者 村上 隆広

印刷 (有)斜里印刷